

平成 25-27 年度

1. 大学史文書データ研究プロジェクトについて

1.1. 目的

総合芸術アーカイブセンターは、学内に分散する多様な文化資源を調査し、歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元する等、文化芸術情報の活用方法を研究する目的で設立された。

この目的に鑑み、大学史文書データ研究プロジェクトは、東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史* に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う。* 図画取調掛、東京美術学校、音楽取調掛、東京音楽学校を含む。

1.2. プロジェクトメンバー：(25-27 年度)

| | |
|---------------------|------------------------|
| 音楽学部教授 副センター長 | 大角 欣矢 |
| 美術学部教授 | 佐藤 道信 |
| 特任助教 | 橋本久美子 |
| 美術学部非常勤講師 (教育資料編纂室) | 大西 純子 |
| 美術学部非常勤講師 (教育資料編纂室) | 坂口 英伸 |
| 特別研究員 (教育資料編纂室) | 吉田千鶴子 |
| 教育研究助手 | 星野 厚子 |
| アーカイブアシスタント (修士課程) | 太田 郁 (平成 25 年度) ** |
| アーカイブアシスタント (修士課程) | 吉田 学史 (平成 26-27 年度) ** |

** アーカイブアシスタントが交代した以外は3年間同じメンバーであった。

1.3. 教育資料編纂室 (美術学部) と大学史史料室 (音楽学部) について

総合芸術アーカイブセンター大学史史料室は、昭和 36 年に開室した美術学部教育資料編纂室と平成 21 年に開室した大学史史料室 (開室時の名称は音楽学部学史編纂室) の 2 室により構成される。部屋の規模、資料収集の実績、活用のあり方等は異なるが、資料閲覧への対応や資料整理について、情報交換し共有に向けて検討を重ねている。

2. 活動報告

2.1. 期間全体 (平成 23-27 年度) の概要

期間全体にわたり東京藝術大学アーカイブズの構築と発信にかかわる諸研究を行った。また公文書管理法への理解を深め、アーカイブズの学内組織や設備環境について研究するとともに、現場の諸問題を通して、本学の使命と現実的諸条件に見合うアーカイブズ構築について研究を行った。スタッフのアーカイブズ研修も継続的に行った。期間全体を通じて下記 7 項目が行われた。

- (1) 東京藝術大学が保有する歴史的資料 (法人文書を含む) のアーカイブ化に関する研究
- (2) 大学史史料室が所蔵する資料のリスト化の研究
- (3) 大学史文書および関連資料の収集、保管、データ及びメタデータの作成に関する研究
- (4) 内外の各種調査研究・閲覧への対応の研究
- (5) 寄贈資料の受入に関する研究
- (6) デジタル化による保管と利用に関する研究
- (7) アーキビストの育成に関する研究

大学史史料室は『東京芸術大学百年史』の編集資料を継承し、新たな資料を蓄積して次の大規模な年史編集に

備えるとともに、それらを広く教育研究等に利用している。

美術と音楽の両学部は平成 20 年より全学的なアーカイブズ構築に向けて検討を開始し、平成 21 年度と 22 年度は学長裁量経費により組織整備を検討し、他大学調査を行っていた。平成 23 年度のアーカイブセンター発足に伴い、本格的にアーカイブズに指標を定めて活動した。

下表は両学部による共同研究の流れをまとめたものである。

| 21,22 年度 | | 23 年度 | 24 年度 | 25 年度 | 26 年度 | 27 年度 | 28 年度 | 29 年度 |
|----------------------------------|--|--|--|------------------|-------|---------------------|---------------------------------------|-----------|
| 「百年史」後のアーカイブズ構築の歩み | 学長裁量経費=全学的アーカイブズ構築に向けた学史プロジェクト | 総合芸術アーカイブセンター | | | | | 大学アーカイブズ再構築と芸術資源アーカイブの構築 | 創立 130 周年 |
| 重点項目 | 大学史史料の公開活用に向けた準備調査 | 他大学のアーカイブズ調査、保管資料のデータ公開に向けたアーカイブズ業務の実践（収集・保管・利用） | | | | | アーカイブズ組織の定着、大学史史料の公開活用、戦略的普及 | |
| 大学史文書の体系的整備 | 学内調査/他大学調査/歴史資料の認識共有 | ▷美術・音楽両学部におけるアーカイブズ構築 ▷演奏会情報・美術情報・情報システムとの協働による 藝大アーカイブへの視点構築（センター内定例 MTG およびシンポジウムシンポジウム等による） 参考：平成 23 年 4 月 1 日、公文書管理法施行。 | | | | | アーカイブズ機能の整備、データの公開と利用促進、150 年史編集の基盤整備 | |
| アーカイブズの構築にむけた研究と業務の実施 | 保管資料のリスト化に着手（「史料の公開と活用に向けた予備調査」(代表:大角) | アーカイブズ業務の三本柱 → → → 利用 | 学内資料：学内倉庫の調査・文書収集 | 総務課法人文書の評価選別への協力 | | | 戦略的資料収集の策定 | |
| | | | 寄贈資料：整理 | 寄贈依頼への対応・資料整理 | | | | |
| | | | ▷資料のリスト化推進、データの共有化を検討 ▷写真のデジタル化を順次行う ▷資料保護と利用のための再整理 | | | デジタル計画策定 コンテンツ作成 | | |
| 依頼製作・依頼作曲の 科研による共同展示・ 学会発表 | | | ▷対応業務の急増：資料調査、相談、 見学調査（研究・番組・演奏会・展覧会・新聞記事・戦没者関係、修学旅行） ▷定期的な小規模展示 | | | リストの公開開始、建物写真等の画像公開 | | |
| 組織整備/人材育成 | ▶プロジェクト内の勉強会 ▶他大学の視察 | ▶アーカイブズ機関の視察(公費私費併せて 15 機関)。 ▶アーカイブズ研修受講 (のべ 9 名)。 ▶研修成果：▷日本アーカイブズ学会登録アーキビスト(1 名)、 ▷日本アーカイブ協会資格認定準デジタルアーキビスト(1 名)。 ▶全国大学史資料協議会への参加・全国大学史展への出展。 ▶関東地区国立大学文書館情報交換会(大角提言・東大と東工大にて) | | | | | 資料収集保存の保全、利用促進、人材育成プログラムを再構築 | |

2.2. 平成 25-27 年度の活動報告：

大学史史料室を大学アーカイブズとして機能するために必要な研究として、制度に関する研究、他大学のアーカイブズ機関の研究、他大学との連携および情報交換を行った。その一方で、公文書管理法は 5 年見直しの時期を迎え、内閣府の公文書管理課および国立公文書館総務課の各担当者が大学史史料室を訪れ、現状視察を行うとともに、国立公文書館等の指定および歴史資料等保有施設の指定を受けるための条件等について話を伺う機会も持つことができた。

2.2.1. 大学アーカイブズ構築に向けた組織整備の研究

2.2.1.1. 他大学アーカイブズ機関の訪問調査

25-27 年度の 3 年間に、公費私費あわせて 15 機関を訪問する機会を持った。その一例を報告する。平成 25 年 7 月には、すでに国立公文書館等の指定を受けた大阪大学と神戸大学、26 年 3 月には歴史資料等保有施設の指定を受けて運用する金沢大学を訪問した。下表は 3 大学のアーカイブズ施設の概要である。

平成 26 年 3 月現在

| 施設 | 指定の種類と時期 | 設置年 | 書庫面積等 | 組織 | 場所 | 補足・備考 |
|------------------|---|--|---|--|------------------|---|
| 大阪大学アーカイブズ | 国立公文書館等および歴史資料等保有施設：平成 24 (2012) 年 10 月 | 平成 18 年 7 月文書館設置準備室を設置 | 特定歴史公文書用 345 m ² 、歴史資料用 119 m ² | 独立部署。 ◎アーカイブズ:室長 1(1)、専任教員 1(2)、兼任教員 12 ◎総務課文書管理室:室長 1(3)、室長代行 1(4)、室長補佐 1(5)、事務補佐員 2(6) | 箕面キャンパス管理棟 | (1)教授併任、(2)准教授、(3)総務課長併任、(4)再雇用非常勤、(5)常勤、(6)非常勤 |
| 神戸大学附属図書館大学文書史料室 | 国立公文書館等：平成 23 (2011) 年 3 月 30 日付 | 平成 22 年 4 月設置 | 102 m ² 。閲覧室展示ホール事務室作業室計 243 m ² | 図書館附属。 室長 1 名(1)、室長補佐 1 名(2)、事務補佐員 2 名(3)・整理補助数名 | 神戸大学百年記念館 | (1)図書館長兼任・教授 (2)専任・特命専門員 (3)非常勤 30h/w |
| 金沢大学文書館 | 歴史資料等保有施設：平成元年 (1989) 4 月 1 日 | 金沢城内から移転の際博物館機能を持つ施設として平成元年 (1989) 4 月 1 日設置 | 事務室等 136 m ² 、収蔵 303 m ² 、展示 301 m ² 、計 740 m ² | 独立部署。 室長 1 名(1)、事務補佐員 3 名(2) | 角野キャンパス。図書館と同じ建物 | (1)兼任教授、(2)非常勤週 5 日、作業補助数名 |

(1) 大阪大学アーカイブズ

- ・視察者：副センター長 大角欣矢
事務局総務課課長補佐 野村智行
附属図書館情報サービス係長 大田原章雄
附属図書館資料受入係長 西山朋代
大学史史料室 橋本久美子
- ・視察日：平成 25 年 7 月 1 日

平成 19 (2007) 年 10 月に統合した大阪外国語大学の管理棟を使用して平成 24 (2012) 年 10 月箕面キャンパスに設置され、「国立公文書館等」と「歴史資料等保有施設」双方の指定を受けた。特定歴史公文書の広大な専用書庫の書架はまだほとんど空の状態に移管に備える。

(2) 神戸大学附属図書館大学文書史料室

- ・視察者および視察日は大阪大学アーカイブズに同じ

神戸大学は百年史編集終了と公文書管理法の時期が重なり、国立公文書館等の指定へと動いた。百年記念館の一角に大学文書史料室はある。平成 22 年に設置され、同 23 年 3 月 30 日付で「国立公文書館等」の指定を受けた。初年度に指定を受けた 7 大学のうち図書館に所属する施設は神戸大学のみで、「国立公文書館等」の指定のみである。図書館所属であることの利点は、図書館の目録検索システムの転用、図書館のシステム管理者を再雇用して史料室のシステム開発が行える点などがある。史料室が大学の組織として認識されにくい弱点はあるが、全体としては図書館所属の恩恵に浴している状況とのことである。同史料室の特定歴史公文書専用書庫は大阪大学とは対照的にすでに満杯である。全壁面に天井まで書架を設置し、高所作業には梯子を使用する。

(3) 金沢大学資料館

- ・視察者：副センター長 大角欣矢
大学史史料室 橋本久美子
- ・視察日：平成 26 年 3 月 19 日
- ・利用日：平成 26 年 3 月 19 日、20 日（橋本のみ）

旧制第四高等学校および金沢医科大学など前身校からの公文書を引き継ぐ同資料館は、平成元年に図書館と資料館を同一建物内に組み込んで建築された。資料館は独立部署として専用の書庫と作業室を有し、「歴史資料等保有施設」の指定を受けた。しかし専用の閲覧室や温湿度管理のできる書庫を備えることが難しく、「国立公文書館等」の指定を受ける目処は立っていない。

同館は室長 1 名、スタッフ 3 名で構成される。うち 1 名が文書担当、1 名が物資料担当、1 名が大学事務職の再雇用者で、全員が週 5 日勤務のパートタイマー（事務補佐員）である。文書担当者 1 名が大学全体の文書を担当する。展示は“物”担当者 1 名にアルバイトがついて行っている。

※所感：「歴史資料等保有施設」の指定を受けることで独自の規則によって運用を可能にし、公文書管理法施行前の平成 23 年 3 月までに移管された学内文書をアーカイブズとして構築し活用も整備されている点は、本学が参照すべき事例であろう。

※利用してみて：訪問調査に合わせ、事前に明治時代の第四高等学校時代の資料をウェブ上で検索し、利用規則に従って閲覧申請を行った。利用規則では 1 週間以上前までに事前申請する。1 日に資料 10 点以内を閲覧できる。申請後、調査目的の内容が含まれる資料リストが届く。それをあらためて申請し、館長決裁印のある書類を受け取った。閲覧当日、資料には事前審査と下見が行われた証しに、該当箇所短冊が挟まれていて閲覧の助けとなった。ただ、実際には館員がチェックした箇所以外にも調査目的の内容が見つかり、リスト以外にも資料が存在する可能性を考えた。閲覧者自身が探し、選び出しやすい方法も探りたい。

※金沢大学資料館が実践した資料整理と目録編成の方法：

金沢大学資料館より平成 26 年 3 月現在で作成した「非現用法人文書データベースの利用について」という資料を入手した。同資料館で複数大学の例を参考にしぼり込んだと聞く。「利用について」は非現用文書目録の凡例、資料番号の付し方、前身校を含む学校分類表、部局番号表、そして 2011 年度移管分のリストである。リストの項目は、資料名/資料分類/学校名/部局名等/受入方法/移管元/移管日/室/書架/箱番号/旧番号/媒体/資料番号/移管年度/学校分類/部局番号/通し番号/利用可能な複製物[あり/なしが記される]/利用制限[現実にはほとんどが“要審査”である]/作成部局等/年代/備考[形状や状態など]/非開示情報/最終閲覧日/展示履歴、となっている。

(4) 金沢大学医学部記念館資料室

- ・視察者：大学史史料室 橋本久美子
- ・視察日：平成 26 年 3 月 20 日

全学を対象とする「金沢大学資料館」とは別に、医学部の資料室も調査したので報告する。

金沢大学で資料館以外に歴史資料等保有施設の指定を受けている機関が、図書館、医学部記念館資料室である。文久 2 年（1862）の加賀藩の種痘所に発祥する医学部の記念館は、同窓生の寄附により建設され、同窓会や講演会場ともなる。その一室が資料室で、人体模型、標本、医療器具、講義ノート、文書等が立体的に展示構成され、金沢大学医学部の歴史のみならず、日本の医学史の展示場となっている。第四高等学校が大学に昇格する以前から医科「大学」であった医学部は、組織的にも第四高等学校と統合と分離を繰り返した。案内してくださった総務課長（山本氏）によれば、医学部同窓生は近代日本医学史と医学部の歴史を重ね合わせた独自の資料展示を保持することを望み、資料館に統合されることを歓迎していないとのことであった。

※所感：医学史料独自の世界を構成している展示に接すれば、同資料室が資料館に移管せずに独立を保っている現状も理解でき、このことは旧制 2 校が合併した本学にも参考になるところである。2 学部がそれぞれ個性ある資料群を形成している現状を尊重し、利用規則や公開基準等についてはルールを共有しつつ、独自性を保持することが好ましい。時代やテーマを共有する横断的企画展示もあり得よう。

※医学部記念館資料室の課題：

魅力ある医学部記念館資料室だが、利用や公開性においては課題もある。
当室は総務課の管理下にあり、普段は閉室し、見学申請により総務課担当者が解錠し案内してくれる。大部の展示目録も作成されているが、リスト公開や検索等には対応しない。展示した当時は資料の背景となる文化や医療史に詳しい人々が携わったが、アーカイブの機能は果たさず、展示ケースにおさめた原状で何年も経過している。同窓会などあるときは現状のまま見学させているとのことであった。
展示室とは別に、近くの小部屋 2 室に、“いつの時代の”何か“不明な物資料が保管される。

2.2.1.2. 研究会・学会等による他大学アーカイブズ機関との情報共有

大学アーカイブズについて最も多くの機関より情報収集することができた研究会は全国大学史資料協議会であったが、日本アーカイブズ学会が扱うアーカイブズ関連機関における諸問題やさまざまなアーカイブの具体例は、本学も参考とするところが多い。平成 27 年度には大角副センター長の呼びかけにより、関東地区国立大学文書館情報交換会を開くこととなり、平成 26 年 4 月に国立公文書館等の指定を受け東京大学と 27 年に同指定を受けた東京工業大学を会場に開催し、各大学の現状報告と会場校の施設見学を行った。参加校は、お茶の水女子大学、学芸大学、筑波大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京大学、本学、それに大阪大学、京都大学が加わり、計 9 大学であった。

2.2.1.3. 内閣府大臣官房公文書管理課および国立公文書館総務課による視察

平成 26 年 12 月 20 日、学習院大学にて、日本アーカイブズ学会その他の主催により「公文書管理法 5 年見直しについての合同研究集会」が開かれ、大角副センター長も参加した。その席上、国立大学法人が保有する法人文書の取扱いについて話題になり、内閣府大臣官房公文書管理課の希望により本学の施設視察が行われ、国立公文書館等の指定のための必要条件、法人文書のインターネット公開、目録作成のあり方等に関する情報交換を行った。

- ・ 日時：平成 27 年 2 月 20 日（金）15：00～17：00
- ・ 場所：音楽学部内大学史史料室（2-1-1）及び美術学部教育資料編纂室（見学）
- ・ 視察者：内閣府大臣官房公文書管理課 公文書管理専門職 下重直樹氏
同 国立公文書館等指定専門官 青池健一氏 ほか 1 名
国立公文書館 総務課企画法規係長 寺澤正直氏 ほか 1 名
- ・ 本学対応：大角、大西、坂口、橋本、星野、野村智行大学事務局総務課課長補佐

※所感：国立公文書館等の指定の必要条件のうち、利用規則の整備と資料目録の作成については、準備可能な段階にあることを確認したが、その一方で適正な保存環境を保つ専用書庫を用意することが現状では絶望的であり、指定はまだ射程圏内にはないと考えざるを得ない。しかしながら旧制校時代の公文書類が法人文書として登録されずに大学史史料室で利用される現状があることから、まずは早急に歴史資料等保有施設の指定を受けることで、法と現実のずれを是正する必要がある。歴史資料等保有施設の指定においても温湿度管理のできる設備が求められるが、国立公文書館等の指定に比べれば緩やかであり、学内の理解と協力を頂ければ現状建物内の工夫により要件を満たすことも可能ではないかと考えられる。

2.2.2. 大学史史料室における国立公文書館等の指定について再考

大学史史料室は、音楽取調掛時代文書、東京音楽学校、東京美術学校以来の文書を蓄積している。国立大学法人のアーカイブズである大学史史料室は、内閣府による「国立公文書館等の指定」を視野に入れるも、現状は指定を受ける条件を満たしておらず、「歴史的資料等保有施設」の指定も受けていないため、利用規則による運用が行われず、学内での機能・位置付けも明確化されていない。したがって利用度が高くても組織図に見えず、発信力も弱い。

この現状を打開するための研究を種々行い、一定の見通しを得ることはできた。情報収集の方法は、大学総務課との情報共有、アーカイブズ研修、他大学の調査などである。

アーカイブズとしての運用に向けてリスト作成や保存環境の研究等鋭意行っており、スタッフも研修を重ねて対応できる力を備えている。残る決定的な問題は施設面である。一定の見通しが立った時点で、歴史的資料等保有施設の指定を受けることは現在の運用を継続するため最低でも必要であろう。平成 26 年（2014）は新制大学が発足した昭和 24 年（1949）から 65 年目に当たり、東京音楽学校と東京美術学校時代の文書はほぼ全面公開が可能な時期を迎えた。

旧制校時代の、教務係等における永年保存文書以外のおもな文書類が大学史史料室に事実上移管されている。喫緊の課題は、内閣府の指定は指定として、学内で法人文書の保存について共通認識を構築し、藝大 150 年史に備えて安定的にアーカイブズを構築することである。

国立公文書館等の指定を受けずに新制大学以降の文書類を事務局で現用文書として保存する場合でも、150 年史編集を視野に入れれば、資料を散逸させないためのルール作りが早急に必要である。

2.2.3. 公文書類の取扱について総務課と共通認識の構築

平成 24 年度より法人文書の保存について総務課と打合せを行った結果、総務課が管理する法人文書の保存期限満了したものについて、アーカイブセンターが総務課の評価選別に協力することとなった。

25 年 7 月、まずリスト上で検討し、総務課倉庫にて総務課立ち会いのもと、アーカイブセンターのメンバーが文書の現物確認を総務課立ち会いのもと行った。しかし管理簿に記載される文書ファイルの現物確認は難航し、特定率も低かった。

学内に国立公文書館等の指定を受けた施設を持たない限り、文書を事務倉庫ですべて現用文書として保管することになる。しかし公文書館等の指定を度外視しても、現在の保存環境では、傷み、カビ、ホコリ、湿度変化による劣化を防ぐことができないのみならず、アーカイブズ構築が進まず、150 年史編集が困難になることは明らかである。早急に改善策に着手せねばならない。

付：「法人文書管理におけるアーカイブセンターとの連携について（案）」11/13 総務課総務係作成

こうした現状をふまえ、11 月総務課総務係が「法人文書管理におけるアーカイブセンターとの連携について（案）」として 3 項目をまとめ、解決策を提示した。その概要を示す。

1. 文書確認の定例化について（データ上の選別は行うが現物確認をほとんど行っていない現状打開のため、現物確認を課・係ごとに定例化する）、
2. 文書の確認方法・範囲について（データと現物の照合を困難にしているのは文書数の多さと管理場所の不整備によるところが大きいので、満了／延長など範囲を特定して同タイトルを確定することで確認数を減らしていく）、
3. アーカイブセンターに移動する文書の保管場所・方法について（アーカイブセンターが延長と判断した文書を原課が管理し続けるため、行方不明になりがちで保存環境も整わず移管を行う際にも煩雑となるため、一時保管場所の設置を検討する。ただし地下倉庫ゆえ環境は悪くアーカイブセンターが利用するさい不便）

総務係はさらに翌 26 年度にアーカイブセンターと連携する作業スケジュールの予定も提言した。

それによれば、6 月頃：前年度の法人文書ファイル管理簿から保存期間満了文書をリストアップ（総務課総務係）、7-8 月頃：期間満了文書リストの評価選別（総務課総務係）9-10 月頃：アーカイブセンターが保存期間満了文書の評価選別*、翌年 2-4 月頃：各担当者が法人文書ファイル管理簿に新規登録、翌年夏頃：内閣府に文書管理の報告（総務課総務係）。

* アーカイブセンターによる評価選別の協力は、26 年度に実際に行われた。

2.2.4. スタッフのアーカイブズ研修等

研修参加

- ・ 平成 25 年度と 26 年度、国立公文書館主催「アーカイブズ研修Ⅰ」（9 月 2 日～6 日）に 4 名参加。公文書の保存、評価と選別など文書プロジェクト内で共有するのに必要な内容であった。
- ・ 平成 27 年度、日本アーカイブ協会主催、準デジタルアーキビスト資格認定講座受講（1 名）。データの収集と利用に伴い発生する著作権問題等を取り上げる。デジタルデータを扱うことが日常化した今日、デジタルアーキビストの基礎知識はアーカイブズ一般の基本であると認識した。

展示見学

1. 企画展示「近代日本の幕開けと私立法律学校」の見学。平成 26 年 1 月 24 日～2 月 28 日。明治大学博物館にて専修・中央・日大・明治の 4 大学共催による。神田地域、文明開化、法律学校、法典論争というテーマを共有し、4 大学のアーカイブズを活用した試みは、本学の両学部での横断的展示のヒントとなる。スタッフ 2 名とアーカイブアシスタント 1 名が見学した。
2. 第 2 回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」に出展および見学。平成 27 年 7 月 3 日（金）～8 月 2 日（日）。明治大学博物館。大学史史料室からも、宣戦の詔勅、青少年に賜はりたる勅語、大正時代の演奏会プログラム、戦後文化祭の写真を出展。
3. 東京外国語大学文書館の展示室（全国大学史資料協議会研究会）立教学院展示館の常設展示学会。（平成 27 年 9 月 18 日、出版文化社第 5 回学園アーカイブセミナー）

2.3. 美術学部教育資料編纂室の報告

2013 年度報告

東京藝術大学美術学部教育資料編纂室

はじめに

美術学部教育資料編纂室は、資料データのインプットの多くをアーカイブプロジェクト設置以前に終えている。プロジェクト実施以後、平成 21—23 年科学研究費補助金「大村西崖の研究」、平成 22-24 年科学研究費補助金「東京音楽学校・東京美術学校の受託作品に見る近代日本の芸術教育」等を含めて更なる資料整理が進んでいるが、多くの個人資料が含まれ、分類の統一を図ることが難しかったため、従来の整理法では将来の公開等には適さないインプット方法のものも多い。そのため資料の整理方法の見直し、統一したフォーマットについて検討中である。現在、資料の閲覧は、主として遺族、研究者、美術館博物館関係者（学術目的で使用予定の出版社・放送局を含む）、学内関係者などに対応しているが、将来一般に公開するためには、著作権、所蔵権、肖像権などの問題を解決し、その上で確固とした公開規則の制定が必須である。

また、総合芸術アーカイブセンター大学史文書データ研究プロジェクト大学史史料室（音楽学部）との資料検索システムをできるだけ統一したものにし、両学部の統一フォーマットおよび公開に関する認識の共有、および規則などを制定する必要、すなわち双方の擦り合わせが必要であるが、音楽学部側とのフォーマットやシステムの統一は未完であり、規則の制定などは未着手である。

2013 年度業務内容に関する報告

(1) 所蔵資料の整理とデータ入力

1 【正木直彦年譜・著作目録】

作成中（前年度から継続） 近い将来正木直彦に関する展覧会の開催（本学大学美術館主催）、または資料目録の公表（編纂室主体）をする予定（時期については未定）

2 【2013 年度 新収資料（寄贈）データ入力済】 486 点

○芸術学科卒業・修了論文要旨（芸術学科より。但し非公開資料とする）

107 点

| | |
|--|-------------|
| ○大村西崖資料補遺 (遺族) | 343 点 |
| ○武谷富蔵資料 (遺族) | 34 点 |
| ○関根則男資料 (関係者) | 1 点 |
| ○明治 39 年度卒業写真その他の寄贈 (明治 39 年度西洋画科卒高島七郎) 卒業写真 | 1 点 (データのみ) |

| | |
|---------------------------|--------|
| 3 【保管資料の再整理および新たなインプット】 | 158 件※ |
| ○東京美術学校モデル関係資料 | 39 件 |
| ○諸新聞切り抜き (明治 24 年 1-12 月) | 1 件 |

| | |
|-----------------------------|------|
| 4 【スキャン】 | |
| ○『東京芸術大学百年史』使用写真 (口絵) | 54 件 |
| ○『明治二十九年九月 入学生在学証明』(焼け残り文書) | 24 件 |

| | |
|------------------------------|------|
| 5 【PDF 化】 | |
| ○『明治二十九年九月 入学生在学証明』(焼け残り文書) | 32 件 |
| ○『東京芸術大学百年史』(東京美術学校編 第一巻) 全巻 | 1 件 |
| ○『東京美術学校校友会月報』 | 7 件 |

※ 点と件の違いは、分類方法の違いによる。

(II) 問合せ、資料閲覧、情報提供等

| | |
|---------|--|
| 1 問合せ | 出版社・放送局等 (2) 遺族 (4) 大学・美術館博物館 (8) 学内 (6) 一般 (2) |
| 2 資料閲覧 | 研究者/遺族・関係者 (7) 大学・美術館博物館 (1) 学内 (5) |
| 3 資料撮影 | 研究者 (1) 大学・美術館博物館 (1) |
| 3 掲載許可願 | 出版社 (1) |
| 4 転載許可願 | 出版社 (4) 大学・美術館博物館 (3) |
| 5 資料貸出 | 東大寺に大村西崖資料貸出 (2013 年 2 月～10 月) 10 月 24 日返却 |
| 6 成果の寄贈 | 図録、雑誌、論文抜刷等 (4) 雑誌『歴史読本』(正木肖像)、図録『横手貞美 未完の青春』(東京美術 学校卒業生に関する問合せ)、図録『狩野派と橋本雅邦——そして、近代日 本』(資料閲覧)、図録、『東洋学の歩いた道』(正木肖像・学習院より)、 図録『奈良時代の東大寺』 |

【問合せ例】

- ① 戦前の留学生高義東 (朝鮮)、許幸之 (中国) に関する調査のため研究者が来室。資料提供、情報交換を行う。同じく留学生李叔同に関する問合せ (文書) あり。資料提供。
- ② 東京美術学校日本画科明治 30 年卒業の藤巻直治の遺族より問合せ。資料および情報を提供。
- ③ 明治 39 年西洋画科卒業の高島七郎の遺族より問合せ。資料及び情報提供 (遺族より明治 39 年卒業写真のデータ提供あり)。

【資料閲覧・掲載許可・転載許可願例】(転載許可願については主として『東京芸術大学百年史』からの転載)

- ① 学習院大学 資料の閲覧、カタログに転載、展示用パネル作成のために更に転載

(III) その他

【寄贈物品資料】

もと美術学部芸術学科使用の映写機 3 台

(IV) 2013 年度 個人の主要業績

1 吉田千鶴子

- ・ 「岡倉天心と文化財保護」『博物館研究』530 日本博物館協会 2013 年
- ・ 「覚三が天心になるまで」『生誕 150 年記念 岡倉天心 近代美術の師』(別冊太陽 209) 平凡社 2013 年 7 月 118—127 頁
- ・ 「我对留日中国美術生資料的整理与研究」[大村西崖と中国(劉曉路訳)]『11 & ZD115 項目 第一階段 国際学術論証会検討文集』所収 天津大学王学仲芸術研究所 2013 年 11 月
- ・ 「斎藤佳三と林風眠」『近代中国美術の胎動』 勉誠出版 2013 年 (斎藤佳三は東京美術学校図案科卒業生・教員)
- ・ 「上野の杜の波瀾万丈 第 16 回 作品展示施設の昔」『藝大通信』27 所収 東京藝術大学 2013 年 9 月
- ・ 「上野の杜の波瀾万丈 第 17 回 サールナートの壁画」『藝大通信』28 所収 東京藝術大学 2014 年 3 月刊行決定 (東京美術学校日本画科卒業生野生司香雪のこと)

2 大西純子

- ・ 「早崎稜吉 中国古美術の紹介者」『生誕 150 年記念 岡倉天心 近代美術の師』(別冊太陽 209) 平凡社 2013 年 7 月 26—27 頁
- ・ 「六角紫水『大連行』——鉄道車両塗装に関わる資料——」『MUSEUM』647 東京国立博物館 平成 25 年(2013) 12 月 25—41 頁
- ・ 公益法人文化財保護・芸術研究助成財団助成金により課題「中国彫刻史形成期における早崎稜吉の活動に関する調査研究」のアメリカ調査実施

3 坂口英伸

- ・ 科研(挑戦的萌芽研究)「震災タイムカプセルの研究」(2013-2015 年度)
- ・ 共同記者発表:高野山金剛峯寺所蔵『関東震災歿死者名簿』(東京美術学校製作)に関して 2014 年 3 月 6 日 於高野山金剛峯寺
- ・ 口頭発表「『関東震災歿死者名簿』の一万年保存計画」第 25 回文化資源学会研究会 2014 年 3 月 15 日 於東京大学

2015 年 12 月 21 日教育資料編纂室作成

大学史文書データプロジェクト報告書

1. プロジェクト期間

2014（平成 26）年度の 1 年間

2. プロジェクト概要

東京藝術大学美術学部教育資料編纂室が所蔵する法人文書およびそれに東京藝術大学（その前身の東京美術学校も含む）に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、それに関する研究と運用を行う。

3. メンバー（3名）

大西純子（非常勤講師）、坂口英伸（非常勤講師）、吉田千鶴子（特別研究員）の計 3 名

4. 2014（平成 26）年度の概要

教育資料編纂室に残る資料のうち、使用頻度の高い資料（『東京美術学校一覧』）および画像（『東京芸術大学百年史』に使用の写真）のデジタル化（スキャナーを使用したスキャン化）を実施した。前者は資料の劣化と破損を防止することが目的であり、後者は外部からの画像提供の依頼に迅速に対応することが目的である。また、寄贈された資料の整理と目録化も行った。

5. スキャン（3件、約 774 枚）

- ・『東京美術学校規則』（第 1 巻、11 枚）
- ・『東京美術学校一覧』（第 2-12 巻、463 枚）
- ・『東京芸術大学百年史』に使用の写真（第 1 巻に使用分約 300 枚）

6. 資料の閲覧・撮影（10件）

畠山記念館、盛岡市先人記念館、東京工業大学、文化庁、中国美術学院、University of Puget Sound、茨城大学五浦美術研究所、広島県立美術館、国立彰化高級中学図書館、筑波大学

7. 資料の掲載・転載（3件）

盛岡市先人記念館、都城市美術館、東京家政大学博物館

8. 資料の提供（2件）

藤巻直治資料、平凡社

9. 資料の寄贈の受け入れ・移管（4件）

芸大石神井寮資料（石神井寮の閉鎖につき、段ボール 3 箱）、岡田捷五郎資料（整理の上で建築科へ移管）、中村勝馬資料（段ボール 9 箱）、石川浩洋・寿衛彦資料

10. 目録作成（1件）

- ・中村勝馬資料（次年度へ継続）

11. 問い合わせ（8件）

美郷町教育委員会、東京美術学校卒業生遺族、東京藝術大学旧職員、日本画研究室、岡山県立美術館、大学院生（東大院博士課程）、日本郵船歴史博物館、長崎新聞、かわうそ商会（NHK 番組制作会社）

12. 所属員の成果報告（2件）

- ・吉田千鶴子「東京美術学校の台湾人留学生」（口頭発表）
- ・坂口英伸「東京美術学校と関東大震災」（論文）『東京藝術大学美術学部紀要』52 号、2014 年、33-50 頁

13. その他

公文書管理研修への参加（12月）

写真のスキャン作業の際には、別置・保管作業も同時に行った。写真をスキャンするという単純作業ではない。写真はアルバムに強力に貼り付いてあり、写真を傷つけないようにアルバムから丁寧に写真をはがし、スキャン後は写真をフォルダに挟んで保管。アルバムには貼り付けずに、フォルダに挟んで別置・保管した。

2015年12月21日教育資料編纂室作成
大学史文書データプロジェクト報告書

1. プロジェクト期間

2015（平成27）年度の1年間

2. プロジェクト概要

東京藝術大学美術学部教育資料編纂室が所蔵する法人文書およびそれに東京藝術大学（その前身の東京美術学校も含む）に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、それに関係する研究と運用を行う。

3. メンバー（合計3名）

大西純子（非常勤講師）、坂口英伸（非常勤講師）、吉田千鶴子（特別研究員）の計3名

4. 2015（平成27）年度の概要

昨年度に引き続き、デジタル化（スキャナーを使用したスキャン化）を優先的に行った。

所蔵資料のうち、使用頻度の高い資料（『東京美術学校一覧』）および画像（『東京芸術大学百年史』に使用の写真）を中心に、本年度は『東京美術学校校友会月報』を追加した。この他にも、東京美術学校の火災（明治44年）の際に焼失を免れた文書も存在し、これらの文書のデジタル化も急ぐ必要がある。また、引っ越しに伴う資料の移動と再整理、寄贈された資料の整理と目録化も行った。

5. スキャン（3件、902枚）

- ・『東京美術学校一覧』（第13-20巻・第48巻、524枚）
- ・『東京芸術大学百年史』に使用の写真（第2巻に使用の約300枚）
- ・『東京美術学校校友会月報』（第17巻第1-9号、78枚）

6. 資料の閲覧・撮影（1件）

広島県立美術館

7. 資料の掲載・転載（2件）

松本市美術館、アルバータ大学（カナダ）

8. 資料の提供（4件）

大学美術館、平凡社、岩波書店、テレビ朝日（「じゅん散歩」）

9. 資料の寄贈の受け入れ・移管（3件）

- ・順天堂大学より創設者佐藤氏の銅像3体の画像、上野直昭資料、村井養作氏関連資料

10. 目録作成（2件）

- ・中村勝馬資料（昨年度より継続）、上野直昭資料（作成予定）

11. 問い合わせ（15）

総務課（×2）、大学美術館（×3）、東京藝大旧職員（×3）、無言館、九州大学、伊豆市資料館、クリスティーズ・

ジャパン、大学院生（京都工芸繊維大学修士課程）、新潮社、堺市美術協会

12. 調査研究（1件）

- ・元東京美術学校校長および東京藝術大学初代校長の上野直昭に関する資料調査
- ・フェノロサ／岡倉覚三供述日本美術史講義筆記ノートの書き起こし

13. 所属員の成果報告（1件）

- ・大西純子「早崎稗吉の活動について—ボストン美術館蔵岡倉覚三蒐集中国彫刻コレクションを中心として」（論文）『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』656号、2015年6月、7-44頁

14. その他（5件）

- ・フェノロサ／岡倉覚三供述日本美術史講義筆記ノートの書き起こし
- ・故村井養作氏関連資料の調査
- ・野生司香雪作のインド・サルナートムラガンダー寺院壁画修理に関する斡旋
- ・引っ越し（旧芸術資料館→大学会館）およびそれに伴う資料の再整理
- ・資料整理用キャビネットの購入

2.4. 音楽学部大学史史料室の報告

大学史史料室（音楽）平成 25～27 年度プロジェクト報告

文書プロジェクト全体については既述のため、音楽側に関する内容のみ

1. 25-27 年度の概要

大学史史料室を年史編集からアーカイブズ構築に転換することに主眼を置き、アーカイブズ機関としての整備に向けた準備調査を行うとともに、保管する資料の目録作成を進めた。

1. 大局的視点に基づく歴史的資料と法人文書の全学的なアーカイブズ構築のための体制整備
2. 全学的なアーカイブズ構築に必要な学内の機関連携
3. 全学的なアーカイブズ構築の視点に基づく大学史史料室 2 室の日常業務

他大学のアーカイブズ機関調査を行って学外情報をプロジェクト内で共有することもできた。しかし平成 26 年末頃より、内閣府で国立公文書館等の指定を行う担当者等と情報交換した結果、現状組織では指定を受けることができないことが明確になった。最大の理由は大学史史料室が 5 年限定のプロジェクト組織であり、先の見通しが不明確な点にあった。申請は保留だが、アーカイブズ機能の強化を図る。

2. 資料のリスト作成

平成 28 年度 2 月現在、リストに入力された点数は、

所蔵資料 4375 点

寄贈資料 6651 点

総数 11026 点である。

この数字は平成 23 年以降に着手したデータ入力分を含み、現在、大学史史料室が保管する資料点数で 95 パーセント以上が入力済と考えている。残る資料についても、順次入力を進め、一度入力されたデータについても資料の再整理とともに更新を図っていく。

点数は Excel データに基づくが、数え方は写真 1 枚を 1 点とする場合も、写真を 100 程度枚貼ったアルバム 1 冊を 1 点とする場合もあり、基本的には物資料としての形状やまとまりに従って数えている。今後再整理によって、現在 1 点としている資料が別個のものと判明すれば分離する可能性もあり、逆に複数とされた資料をまとめて 1 点と数える可能性もある。

今後はリストの公開範囲を定め、公開準備に入る。公開に際しては、当面は個々の資料名ではなく「〇〇氏関係資料」と表示してキーワードを加える等の方法も考えられる。しかしこの方法では全ての調査依頼に対してスタッフが必ず準備調査にあたる必要が生じるため、調査者側で希望資料を特定できるスタイルのほうが望ましいと考えている。

3. 寄贈資料について

- ・ 成果物の寄贈：

25-27 年度に、大学史史料室を利用した成果物として、60（個人と機関）より 78 点の刊行物（図書、CD、DVD）、論文、番組 DVD 等が寄贈された。閲覧等による資料の利用以外に、調査研究の相談対応や助言に対するものを含む。利用者側が「利用した」と認識して寄贈するこれらの成果物が次の研究者の資料となり、史料室の利用から少しずつだが研究の好循環が生まれている。

- ・ 25-27 年度の寄贈資料全体では、101 個人より 5791 点。（←入力作業件数に基づく）

- ・ 内訳：平成 25 年：21 個人より 301 点。16 機関より定期刊行物等 30 点。

平成 26 年：24 個人から 305 点。25 機関より定期刊行物等 42 点。

平成 27 年：23 個人から 505 点。22 機関より定期刊行物等 34 点。

- ・27年度には上野直昭東京藝術大学初代学長（美学・美術史）とひさ夫人（東京音楽学校卒業ヴァイオリニスト、上野学園大学名誉教授）の資料が寄贈された。国分寺市内の遺宅に調査に通って選別・梱包し、段ボール箱計36箱相当を収集した。その約半分にあたるひさ夫人関係資料を当室が受け入れた。受け入れ後、年度内に資料の種類や構成が把握できるよう整理を計画し、下記のような方針とした。

①出版物（図書、楽譜）についてはなるべく著者・作曲者・タイトル等だけでも入力する。②手稿譜や曲名の特定しがたい楽譜等については、その概要と今後の手掛かりになる情報を残す。③写真については可能ならばそれぞれ特定できる情報を残し、それ以外は枚数を数える。④演奏会プログラムは、大学史史料室が保存するプログラムの欠落を埋める資料もあると推測されるが、現段階で個々の入力を行うのは時間的に現実的ではないため点数を数える。⑤手紙類の整理や解明には相当期間を要すると推測されるため、現段階では最低限、葉書や封書など種類ごとに点数を数えることとし、宛名や差出人の整理は次の段階に送る。

- ①～⑤の方針に従い、星野教育研究助手がデータ入力シートを作成し、吉田アーカイブアシスタントとともに資料の種類ごとの分類等を行い、実際に入力もして作業環境を整えた。年度末近く、プロジェクト経費により大学院生3名が、計102時間でデータ入力を行い、資料点数を数える等の作業にあたった。項目やその結果、資料の、助手、アーカイブアシスタントが図書、楽譜等1158件を入力し、書簡や演奏会プログラム等は個々の入力はせず分類し点数を数えることにとどめた。入力件数を含め、4835点を数える。作業の流れと結果は「2.5.1.」および「2.5.3.1.」に詳しい。手紙類には上野直昭および家族との連名のものが含まれることから、今後、直昭関係の手紙類を受け容れた教育資料編纂室とデータを共有していく見込みである。

4. 紙資料のデジタル化

資料保存と利用のためデジタル化を行った。

- ・明治時代文書「自明治卅三年至昭和九年 學事年報」全1綴
- ・占領期の文書綴「聯合軍最高司令官総司令部ヨリノ指令」全1綴
- ・大学学報 279号分（Web上のPDF版とデジタル版あわせて350号分を整理）
- ・学内外展示のための写真デジタル化：50点
- ・データのみ寄贈される写真等の保存のためのデジタル化：300点

学内外における利用目的のためのデジタル化の需要は増加すると見込まれる。

来年度以降はアーカイブ構築のため、短期・中期計画に沿ってデジタル化を進める。

5. 対応業務について

- ▶学内外対応件数（来訪・電話・メール、郵便等による）

平成25年度 67件

平成26年度 97件

平成27年度 104件 例：卒業生家族の在籍等、マスコミ：戦没学生3名の調査

※27年度の場合、常時6～8件の照会・相談に並行して対応している。

- ▶相談の例：

▷戦没者関係の調査（戦後70年にあたる平成27年はご遺族とマスコミの依頼を受け対応）

ケース①出陣学徒で戦病死した生徒について。新聞数紙が取り上げ、作品は音楽学部オープンキャンパスでも演奏された。在学中に学んだ足跡など調査。

この人物については、ドキュメンタリー映画を専攻する他大学学生が、テーマとして映画制作したいと遺族を通じて依頼があり、作曲されたオペラ断片の原作や影響を受けた環境などについて新たな調査が始まっている。

ケース②出陣学徒で訓練中に殉職した生徒について。調査の結果、師事した教師が判明したことで、遺族と知り合いの研究者が作品の解明にも乗り出した。作品演奏会が作曲者の郷里で行われた。

ケース③繰り上げ卒業生で南洋を移動中に戦死した生徒について。すでに生徒の郷里の放送局などが取り上げていたが、遺族よりあらためて母校での足跡を知りたいと依頼。在学中の調査を行った。遺族から提供された情報には、学友（戦没学徒）についての手掛かりが含まれていた。

- ▷卒業生調査（子孫、研究者、マスコミ関係による依頼。16件すべて判明）
- ケース①京都帝大の工学部工業化学科教授・喜多源逸と結婚した前田襄について。
 - ケース②大正時代にヴァイオリンを専攻し、卒業から2年後に留学先のベルリンで自死した先祖について東京音楽学校で学んだ確証を得て青春期を知り、慰霊顕彰したい（ご遺族から留学中の写真提供）
 - ケース③東京美術学校を卒業した留学生でオペラにも出演した女性について、東京音楽学校での様子を知りたい（その後、当室で情報収集した結果、別の学校で学んで可能性が大きいことを依頼者に伝えた。その後も相談は続き、対応継続中。伝記的研究に基づく出版物を準備中）
- ▷長期の対応（完了した事例と継続中の事例）
- ケース①7年越しの事例。始まりは昭和15年の幻の東京五輪と万博の音楽の資料照会であった。その後質問は当時の演奏会に写る人物の特定、ポスター制作者などに拡大し、夫馬信一著『幻の東京五輪・万博一九四〇』（2016）刊行。
 - ケース②「戦死した父親は東京音楽学校出身」と聞いたまま70年を経過し、ようやく調査に乗り出したが、依頼された名前が東京音楽学校関係に見つけることができず、依頼者の話を聞き直すと、受験前の学歴や演奏会出演の話などから私立学校の可能性も考えられ、東京音楽大学と国立音楽大学に照会したが確認できず、再び詳しい書類をたどり始めている事例。

6. HP上の資料公開

大学史史料室の資料のデジタル公開としては、情報システムプロジェクト（嘉村情報芸術研究員）の協力により、総合芸術アーカイブセンターのHPより公開された成果物を記す。

- (1) 「東京音楽学校が作った歌」 <http://archive.geidai.ac.jp/597>（平成26年1月公開）
百年史編集時における調査から科研調査に展開し、楽譜原資料や復元音源の録音などから新たにコンテンツ化された労作である。公開に際しては、それぞれ著作権関係をクリアし、作詞者の著作権者連絡先不明により最後まで難航した1曲については、文化庁著作権課にも度々相談したが、最終的には遺族8名の承諾を得ることができ、7曲の公開に至った。
- (2) 大学史史料室「青い箱」写真 <http://archive.geidai.ac.jp/3395>（平成27年2月公開）
公開された写真のほとんどが昭和52年（1977）の創立90周年記念誌「音楽学部の歩み」に掲載されているが、それ以外の写真も含まれ、資料群の形成由来は判然としない。昭和52年の基準では肖像権、プライバシー権等もほとんど問題にされなかったと考えられるが、有名演奏家、常勤教員、当時の学生も写っていることから、HPに掲載しつつ著作権関係の研究課題ともなっている。
- (3) 吉本光蔵撮影日露戦争写真 <http://archive.geidai.ac.jp/4241>（平成27年10月公開）
明治時代に活躍した海軍軍人・吉本（1863年11月16日[文久3年10月6日]～1907年[明治40]6月11日）は東京音楽学校でクラリネットの名手として客演したことがあり、戦争では第二艦隊旗艦「出雲」に乗り組み従軍した。資料は吉本の親族からの寄贈で、写真46枚中には銀化により不鮮明な画像もあるが、稀少な資料である。

7. 資料の掲載・転載（21件）

- ▷博物館明治村におけるパネル展示に音楽取調掛の雇い外国人メーソンの写真。
- ▷全国大学史展の学生たちの戦後コーナーに、第一回芸術祭の野外演奏写真。
- ▷デジタル教科書に音楽取調掛および東京音楽学校の校舎の写真掲載
- ▷専修大学の創立者顕彰企画展のパネル展示に伊澤修二と目賀田種太郎写真
- ▷音楽学部オープンキャンパス（平成27年7月）における鼎談（宮田学長・澤学部長・大中恩登壇）のスライドに東京音楽学校時代の卒業写真等を提供・作成
- ▷その他：藝大定期演奏会および上野学園大学定期演奏会等への人物、楽譜、演奏会写真のデータ提供、研究書、同好会誌、論文への人物写真・楽譜画像の掲載等

8. イベント及び学会等における大学史史料の発信

- (1) 音楽学部イベント：ホームカミングデイ講演（平成 27 年 1 月）に文書と写真資料を投影
- (2) 学会発表・シンポジウム：東洋音楽学会シンポジウム（25 年 11 月）、洋楽文化史研究会シンポジウム（26 年 1 月）、アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム（26 年 6 月）、東洋音楽学会研究発表（「乗杉嘉壽東京音楽学校長時代への敗戦後の視座の転換——『聯合軍總司令部ヨリノ指令』『小宮豊隆小宮豊隆資料を手掛かりに』（27 年 11 月）、海道東征シンポジウム（27 年 11 月）のスライドに文書資料と写真投影。
- (3) 論文「乗杉嘉壽東京音楽学校長の青年期における社会教育的教育観の形成」（『東京藝術大学音楽学部紀要』40 集、平成 27 年 3 月、91-106 頁）
- (4) 企画展示にて原資料およびデジタル複製資料の展示
 - ▷平成 26 年と 27 年の文化祭（「藝祭」）期間に、大学史史料室内で資料展を行った。
 - ▷平成 26 年は寄贈資料を紹介する趣旨で、近年とみに増えた寄贈資料を公開した。
 - ▷平成 27 年は寄贈資料の初公開を行ったほか、戦後 70 年に鑑み、東京音楽学校と戦争に関連する資料に光を当て、戦没学徒のご遺族から提供された資料も公開した。展示物約 200 点を、学内資料と寄贈資料が約半々で構成した。以下は展示リストの一部である。
 - 「明治十八年卒業登録簿（文書綴）」
 - 「音楽取調掛全科卒業生（写真）」
 - 「オルフォイス演奏記念（寄贈・演奏会写真集）」
 - 「宣戦の詔勅（巻物）」
 - 「東京音楽学校学生歌（寄贈・楽譜）」
 - 「通信教育のテキスト『ピアノ奏法』（寄贈）」
 - 「岡田二郎 海軍委託生第 30 期生（寄贈・写真）」
 - 「片山正見氏の作曲法受講の記録（寄贈・ノート）」
 - 「田中ひさ氏写譜 ヴィエニャフスキ《スケルツォ・タランテラ》（寄贈）」
 - 「田中ひさ氏 音響学講義ノート（寄贈）」
 - 「山田耕筰『若き日の狂詩曲』直筆原稿（寄贈）」
 - 「昭和十八年九月 山本元帥讃仰 演奏旅行 収支計算書 東京音楽学校（文書綴）」
 - 「日露海戦写真（軍楽隊ノ整列）（寄贈）」
 - 「精勤賞（寄贈・文箱）」
 - 「討清軍歌（寄贈・手稿譜）」
 - 「歌劇ボカチオ 恋はやさしい野辺の花よ！（寄贈・楽譜）」
 - 「昭和十八年十月—十九年三月時間表（文書綴）」
 - 「鎮魂歌 正宏君の英魂に捧ぐ 鬼頭恭一（借用・手稿譜複製・原本は靖國神社所蔵）」
 - 「戦死届『復学願書』（文書綴）」
 - 「『白狐』第二幕 村野弘二作曲 岡倉天心原作オペラ（借用・手稿譜）」
 - 「Music Note（借用・作曲のスケッチ）」
 - 「聯合軍最高司令官総司令部ヨリノ指令（文書綴）」
- (5) 見学者受け入れによる藝大史の普及と資料紹介
 - ▷修学旅行：①奈良県立高校の音楽科、②長野県伊那市立高遠小学校 6 年生、
 - ▷宮崎県高等学校長会（←校歌の作曲が東京音楽学校教員。5 名×2 回）、
 - ▷本学受験生のための施設見学：音楽学部楽理科、大学院音楽研究科音楽文化学専攻アーカイブズ関係者の見学：①東海大学、②専修大学

2.5. 大学史史料室のアーカイブ構築に関する実践報告

2.5.1. 教育研究助手より

平成 25 年度より 3 年間の業務を終えるにあたって

—大学史史料の存在意義と問題点、今後の展望—

大学史史料室（音楽）教育研究助手 星野厚子

はじめに

報告者は、総合芸術アーカイブセンター（以下、アーカイブセンターとする）発足後の 3 年目、すなわち、平成 25 年 4 月から 3 年間、大学史史料室（以下、当室とする）において、教育研究助手をつとめた。業務は、目録作成（史料のデータ入力）、歴史的史料のデジタル化（文書・写真等のスキャン）を中心に行った。この 2 点を述べれば報告は完了してしまうが、業務に携わる中で、当室所蔵の史料群がいかに貴重なものであるか、そして、目録作成とデジタル化が、アーカイブ（とくに文書系アーカイブ）にとっていかに大切な業務であるかを報告者自身が痛感したため、具体的な事例を交えながら報告することとした。なお本文では、当室所蔵の学内文書を所蔵史料、学外から当室に寄贈された史料を寄贈史料と呼ぶこととする。

1. 業務内容

1 年目の主な業務は、前任者から引き継いだ所蔵史料の目録作成と、寄贈史料の目録作成を行った。1 年目で、所蔵史料の目録作成はほぼ完了した。

2 年目は、寄贈史料の目録作成を中心に行ったほか、写真を中心に、デジタル化作業を行った。催しでは、大学祭（「藝祭」）での史料展示、音楽取調掛発足 135 年記念のホームカミングデイにおける史料展示にかかわった。

3 年目は、2 年目に引き続き寄贈史料の目録作成、デジタル化作業を中心に行い、所蔵史料の点検も順次行った。また、大学祭での史料展示にかかわった。

2. 目録作成とデジタル化

（1）所蔵史料と寄贈史料

報告者は、平成 25 年 4 月から平成 28 年 2 月末日までに、所蔵史料 2201 点、寄贈史料 1483 点のデータ入力を行った。寄贈史料の内訳は、101 名からの寄贈史料 1138 点（このうち、当室の史料を利用した成果物の寄贈は、60 名から 78 点）、63 機関からの寄贈刊行物 345 点である。

所蔵史料は、明治時代からこんにちまでに東京音楽学校および本学にかかわる文書綴、写真類などが大半を占める。保存状態は、おおむね良好な史料が多いが、作成から 100 年以上経過している史料など、表紙や背表紙に劣化や損傷のあるものも少なくない。

寄贈史料は、①東京音楽学校や本学にかかわった人物に関する史料、②当室の史料を利用して執筆された刊行物類、③大学等諸機関の刊行物類、の 3 つに大別される。①は、教職員、卒業生、本学関係者からの寄贈で、史料の種類は、在学当時使用していた楽譜や書籍、講義録、卒業アルバム、演奏会パンフレット、賞状、録音映像資料など、多岐にわたる。②は、当室利用者が執筆した著作物、すなわち、書籍、論文、新聞記事などである。③は、全国大学史資料協議会や、各大学から届く報告書やニュースレターなどである。その他に、音楽研究者・音楽愛好家からの演奏会プログラムや書籍類もある。

（2）目録作成

目録の作成には、所蔵史料、寄贈史料ともに、エクセルを使用した。

所蔵史料は、1 点ずつ箱や封筒に封入して保管している。目録作成は報告者の着任以前から進められており、着任後は、入力方法などをそのまま引き継いで作成した。設定項目は、【配架場所】、【史料名】、【備考】である。寄贈史料は、史料を寄贈者ごとに整理して中性紙箱などに収納する方法を採用しているため、「〇〇氏寄贈史料」などとタイトルをつけ、データも寄贈者ごとにシートを分け、史料の種類に特化した項目を設定している。項目は、【史料名（和文）】、【史料名（欧文）】、【数量】、【分類】、【種類】、【保存状態】、【著者】、【作曲者】、【備考】、【受入日】、【スタッフ用備考】である。【分類】と【種類】は似通っているが、【分類】は、エクセルの機能で「演奏会資料」、【楽譜】など、10 個の入力規則を設定して選択式にし、表記の揺れが少ないようにした。【種類】に

は、「合唱譜」、「演奏会プログラム」など、史料のより具体的な内容を入力している。一般的には、史料への書込みなどは歓迎されないが、寄贈史料では、使用形跡が重要な手がかりとなりうるという特徴を備えているため、署名や書き込みの有無、保存状態を細かく書き留めるようにしている。必然的に備考欄の情報も増える。

現在の史料総数は、所蔵史料 4375 点、寄贈史料 6651 点である。作成した目録は、当室備え付けのパソコンで検索できるようになっている。

(3) デジタル化

報告者が、歴史的史料のデジタル化作業に本格的に着手したのは2年目以降で、これまでに一時的な使用目的のものを含めると約 363 点のデジタル化を行った。

所蔵史料・寄贈史料ともに、経年劣化は避けられない。すでに述べたとおり、作成から 100 年以上経過している史料もあり、かつ、その史料の多くが唯一無二であるためである。このような史料は閲覧希望も多く、原本保存のためにもデジタル化しておく必要がある。写真によっては銀化が進んでいるものもあり、デジタル化は急務であることは言うまでもない。

3. 史料展示

報告者は、平成 26 年度、27 年度の2回、大学祭「藝祭」（9月初旬）に合わせて開催された史料展示にスタッフとしてかかわった。

とくに平成 26 年度では、「寄贈史料展」として、当室に寄贈された史料を中心に展示した。音楽教育研究者、本学教職員、学生、史料寄贈者が主な来場者であった。普段は書架等に収納された史料が、展示ケース内や掲示物として所狭しと並んだ展示は、充実したものとなった。執務室を展示場所としたことも、当室の現状を知っていただく上でよい機会であったと思う。また、特筆したいのは、来場者同士、とくに、史料寄贈者同士が顔を合わせることによって、時空を超えた同窓会のようなものが展開されたことである。史料寄贈者は、本学関係者のご遺族が多く、ご自身の親世代が演奏で共演していたことや、同じ時期に本学にかかわっていたことなどを懐かしそうに語っていたことは、印象的な出来事であった。

4. 問題点と今後の展望

(1) アウトプット

この3年間で、目録作成というインプットは相当数行えたと自負している。しかし、アウトプット、すなわち公開とその後の利活用のための情報提供がまだ不十分であることが現状である。

ここには、歴史的史料や、個人史料を扱う上での大きな問題がある。史料の性質上、目録作成を完了した直後に公開できることはまずない。歴史的史料には、個人成績や書簡など、個人情報にかかわる史料も多く含まれている。そのため、保存期間や著作権等に鑑み、内容を検証する二次的作業が欠かせない。寄贈史料では、寄贈者の承諾があってからの公開が望ましい。

デジタル化作業については、アーカイブセンターのホームページから、その成果の一部が公開されている。デジタル化した史料の公開は、二次使用のコンセンサスを徹底し、今後も一層力を入れたい業務である。

(2) 年史の編纂を見据えて

本学の草創期からの歴史は、『東京芸術大学百年史』（以下、『百年史』とする）11冊（音楽学校・音楽学部6分冊、美術学校・美術学部4分冊、大学篇1冊）によって、明治20（1887）年以降の100年間の事跡が、平成15年までにまとめられた。当室に寄贈される諸大学の大学史編纂書籍類でも、これだけの大部は例をみない。

『百年史』刊行後の現在、150年史、200年史を見据えた史料の蓄積を常に念頭に置いている。具体的には、とくに学内行事にかかわる学内で作成される事務文書、学内刊行物の収集である。本学は、通常の校務のほかに、演奏会などの催事が数多く行われていることが特徴である。本学の演奏会を調べるための有効な文献にもなっている『百年史』に鑑み、演奏企画室を通じて、本学がかかわった演奏会のパンフレットを定期的に収集・蓄積している。また、学内演奏会や卒業試験、各科で行われる小規模の演奏会など、実技の教習課程がより具体的に見えてくる史料の収集を、可能な限り行っている。しかし、日々様々な催しが行われているため、全てを網羅できていないのが現状である。今後は、学内刊行物は当室に必ず1部提供していただける仕組みを作りたい。

(3) 学内における大学史史料の重要性の認識

当室は、『百年史』編纂の後継組織として認識されているほか、当室を知る方法は、利用案内とアーカイブセンターのホームページである。学内における大学史史料、そして大学史史料室の業務は、年々周知されてきているように思う。それは、本学学生からの文書類の閲覧申し込みの増加、本学事務からの問合せの増加からもわかる。しかし、学外の利用者数に比べると、学内者の利活用は少ない。繰り返しになるが、当室の所蔵史料は、東京音

楽学校・本学事務がかかわる文書類と写真が大半を占めている。すでに『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』¹でその大部分は整理・紹介されているが、その内容は、入退学書類、名簿、試験問題、試験成績、授業時間表などである。寄贈史料では、楽譜や講義録、卒業アルバム、演奏会パンフレットなどである。これらの史料は、当時の大学のカリキュラムや指導方法を知る一次史料であり、本学の成り立ちを伝える一級史料といえる。一見、大学の歴史を知ることと、本学の主体である実技の教習は乖離しているように考えられがちであるが、「芸は人なり」という言葉があるとおり、本学卒業生の演奏傾向や研究分野には、本学の教育課程が大きく寄与していることは言うまでもない。このことから、大学史史料から読み解く教育機関としての本学研究、本学が輩出した演奏家・研究家の研究、入学者数が減少傾向といわれている昨今、原点回帰に基づく本学の将来性の検討において、とくに有効な史料群となりうるであろう。

むすびにかえて

本学はどのような歴史を経て現在に至っているのか、それを知ることができるのは大学史史料である。偶然訪れた音楽学部の学生が、当室入口に掲示してあった地図に目を留め、現在の敷地配分とは異なることに驚いていた。3年前の報告者もそうであったが、自身のかよった大学の歴史について無知であることを、当室に来て痛感したのである。

大学史史料は、実技の習得や演奏技術の向上に直接的にはかかわりのないものかもしれない。しかし、こんちの音楽教育の礎を築き上げた東京音楽学校の教育方針は、とくに、日本人が西洋音楽を学ぶという普遍的な本学の状況に、必ず光を照らすものであると確信している。そのために、まずは学内における大学史史料の重要性の周知、そして史料の利活用に向けた環境整備が必須であることを痛感している。

業務を通じて、橋本久美子特任助教には、さまざまなご教示をいただいた。史料的なことはもとより、問い合わせに対する真摯な対応や、史料寄贈者への礼節を重んじる姿勢は、報告者にとって大変印象深く刻まれている。

¹平成 17-19 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、研究代表者：大角欣矢、東京：東京芸術大学音楽学部楽理科、2008 年 3 月。

2.5.2. アーカイブアシスタントより 平成 25 年度

2013 年度 AA 報告書

アーカイブアシスタント 太田 郁
(大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 2 年)

作業概要

1、所蔵資料の目録作成・データ化、整理

- ・藝大書報デジタル化
- ・演奏会情報の入力（大学史文書プロジェクト内）
- ・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力
- ・演奏会パンフレット類の整理
- ・学内文書類の目録作成

2、寄贈資料の目録作成・データ化、整理

- ・大久保氏寄贈資料の整理（移動）
- ・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜の目録を作成中

3、その他

- ・明治大学博物館展示「近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争」見学

詳細

1、所蔵資料の目録作成・データ化、整理

・藝大書報デジタル化（スキヤニング）。昨年度から引き続きの作業。今年度は本部庶務課より資料をお借りして PDF 化作業に入った。学報は 1951（昭和 26）年より発行されており、確認できた最終号は 2009 年 5 月の第 457 号である。号外 16 号、その他 3 号もある。第 374 号以降は藝大ホームページで閲覧可能である。これまでに 341 冊分の確認をした。

・演奏会情報の入力。2007～2013 年度に行われた演奏会パンフレット、チラシ等から、演奏会に関する情報をまとめた。星野教育研究助手から作業を引き継いだ。

その後、音響・映像プロジェクトでも音源公開の為に同様の情報入力をしていることがわかり、合同で作成することになった。音響・映像プロジェクトでの音源公開に必要な著作権・著作隣接権の問題から、作曲家・出演者等についても全て反映させた。今年度は 2012～2013 年度の演奏会情報と、「M コレクション」（過去に行われた藝大の演奏会の音源）の演奏会情報をまとめた。2012 年度は 111 件、2013 年度は 68 件の確認が出来た。

・史料室内に保管されていた未整理の演奏会パンフレット類をファイリングした。そのほとんどは 2007～2013 年度のものである。百年史以前のパンフレットについては、史料室では演奏会種別（藝大オペラ、オーケストラ定期など）毎にファイリングしていたが、近年の演奏会は企画の種類が増え、種別で分類することは難しいので、日付順にファイリングした。

- ・美術学部教育資料編纂室倉庫に保管してある音楽学部の資料について、その目録を作成した。

2、寄贈資料の目録作成・データ化、整理

- ・大久保氏寄贈資料について、保管環境を整えるための整理に関わった。

・瀧井敬子氏寄贈資料の整理。藝大の定期演奏会を中心とした演奏会パンフレットと、雑誌『音楽芸術』付録の楽譜が寄贈されており、後者の目録を作成中である。藝大図書館にもいくつか所蔵があるシリーズなので、図書館の所蔵の有無についても確認している。現段階で 103 件確認済みである。

3、その他

・明治大学博物館で行われている企画展示「近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争」を見学した。大学史文書の活用・展示方法についての調査見学を目標にしていた。

この会は、複数の大学の大学史資料課が共同主催したもので、手紙、写真、地図など各大学が所蔵している文書類の展示によって、創立者たちの理念などが垣間みられた。

作業に関して

- ・演奏会パンフレット情報入力については、大学史文書担当箇所の入力作業は星野教育研究助手と共同で行ったので、どこまでの情報を取っていくべきか、史料室で今後活用できる状態にするために必要な情報は何か、といった疑問点について相談しながら入力できる点で、複数人だと作業しやすいと感じた。
- ・史料室内には百年史以後～2011 年頃までのパンフレットは揃っていない。この間に定期演奏会以外にも演奏会シリーズ、プロジェクトや単発の演奏会も増えているようで、今後パンフレット類が集まったときには演奏企画室等に確認しながら、入力・分類について再度考える必要があると思われる。

アーカイブアシスタントより 平成 26 年度

2014 年度 AA 作業記録

アーカイブアシスタント 吉田 学史
(大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 2 年)

作業概要

1. 資料の目録作成、整理
 - ・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力
 - ・演奏芸術センター寄贈資料のうち、演奏会プログラムの目録作成
 - ・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜等の目録作成
2. 寄贈資料展に関する作業
3. 明治 29 年演奏会の楽曲に関する調査
4. その他

詳細

1. 資料の目録作成、整理
 - ・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力

昨年度に引き続き、音響・映像プロジェクトと合同でここ数年の演奏会情報をまとめた。今年度、報告者は 2011 年度、2013 年度、2014 年度（2015 年 1 月まで）の演奏会情報に関わっており、そのうち 2011 年度の演奏会情報 43 件、2014 年度の年間演奏会概要（計 100 件）と詳細情報 57 件を入力した。なお 2011 年度の情報に関しては、大学史史料室に演奏会パンフレットが完全には揃っていないため、簡潔な情報しか記載されていないチラシから情報を補ったものも含まれている。また、情報記載方法の見直しやそれに伴う修正作業も行った。

 - ・演奏芸術センター寄贈資料のうち、演奏会プログラムの目録作成

演奏芸術センターから寄贈された資料には大量の演奏会チラシ・パンフレットなどが含まれており、今年度はその目録を作成した。これらの演奏会資料はそれぞれ 1 部しかないものから 124 部あるものまで部数がまちまちであった。全てを合計すると 76 種類の演奏会資料があり、その総部数は 1392 部であった。これらの資料は今後各種 2 部ずつを選び出し、残りは処分される予定である。

- ・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜等の目録作成
- 瀧井敬子氏寄贈資料のうち雑誌『音楽芸術』付録楽譜として分類された資料の目録作成を昨年度に引き続いて行い、完成させた。報告者は『音楽芸術』付録楽譜 26 件とその他資料 5 件、合計 31 件を入力した。

2. 寄贈資料展に関する作業
- 藝祭期間中（2014 年 9 月 5～7 日）に大学史史料室で行われた寄贈資料展に際して展示の準備から後日の片付けまでの作業を行った（7 月 16 日～9 月 10 日）。作業は会場設営、資料の配置・展示、展示品リスト作成など多岐にわたった。報告者は部屋の計測、展示資料の額装や掲示、展示品リスト作りや寄贈された成果物に寄贈者名を記した紙片の挟み込みなど様々な作業を行った。
- また、展示期間中には AA とは別にスタッフとして勤務し、来場者対応、来場者数カウント、写真撮影などを行った。

3. 明治 29 年演奏会の楽曲に関する調査

2015 年 1 月 10 日に開催された東京藝術大学音楽学部ホームカミングデイ第 1 回にて行われた「明治廿九年第一回同聲會演奏會一部再現演奏会」のための調査を行った。主要な作業はまず、再現演奏する曲目を特定するために、当時のプログラムや批評文による断片的な情報から当時演奏された曲目の特定を行った。報告者は芸大図書館所蔵資料や Web 上の資料などから、S.Webbe やハイドンなどの楽曲特定を試みた。また、著作権等の問題を確認するために、筆名で書かれた批評文の著者や、当時の楽曲の編曲者 2 名の生没年調査も行った。

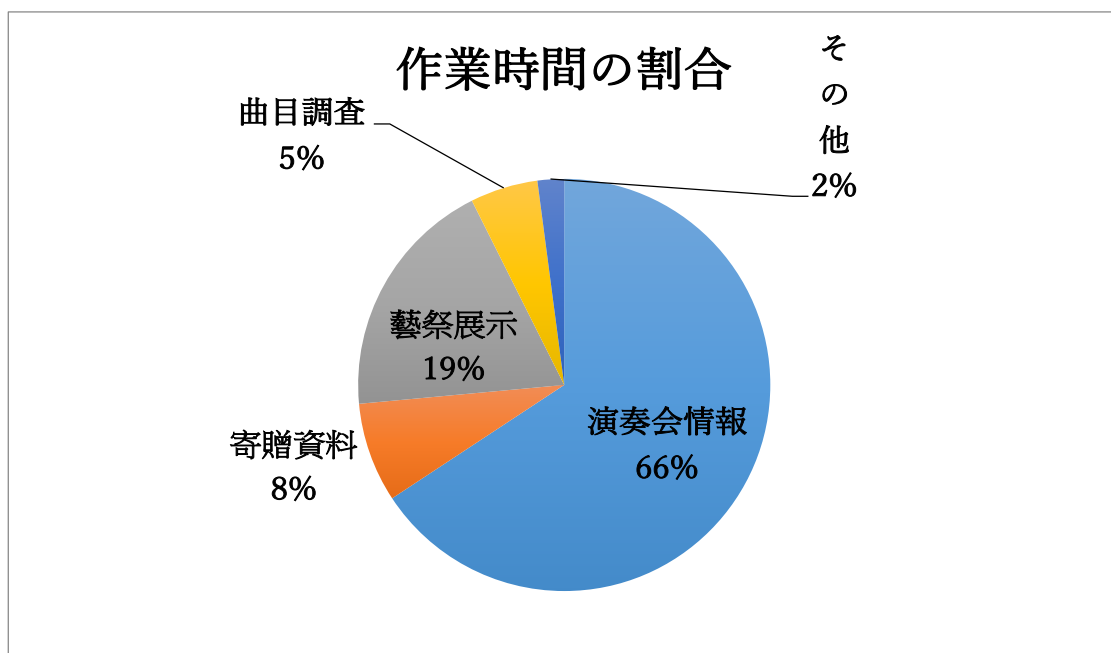
4. その他

以下の作業も行った。

- ・ 来訪者の探している資料の下調べ
- ・ 寄贈資料リストのチェック・見直し
- ・ 寄贈資料の保存状態の点検・入力

参考：大まかな作業時間とその割合（※出勤表を参考に再構成）

| 作業 | 時間（単位：時間） |
|---------|-----------|
| 演奏会情報関係 | 157.75 |
| 寄贈資料関係 | 18.75 |
| 藝祭展示関係 | 45.75 |
| 演奏会曲目調査 | 12.75 |
| その他 | 5 |
| 合計 | 240 |



アーカイブアシスタントより 平成 27 年度

2016/02/17

2015 年度 AA 作業記録

アーカイブアシスタント 吉田 学史
(大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 3 年)

作業概要

1. 資料展示に関する作業
2. 上野ひさ関連資料の調査と整理
3. 大井悌四郎関連資料のリスト作成
4. 歴史的資料・写真のデジタル化
5. 演奏芸術センター寄贈資料の演奏会プログラム整理
6. 東京音楽学校時代のピアノ課題データの補足
7. その他

詳細

1. 資料展示に関する作業

2015 年 9 月 2~4, 6 日に大学史史料室で行われた資料展示に際して会場の準備から当日のスタッフ、後日の片付けまでの作業を行った(2015/08/07-09/30)。作業は多岐にわたるが、その中で報告者は準備として展示ケースの運搬・設置、展示資料の選定(木下保所蔵楽譜、吉本光蔵による日露戦争写真など)、資料の複製(スキャン)・額装・掲示などの作業を行った。展示期間中はスタッフとして勤務し、展示案内、会場監視(来場者数カウント)、展示資料の整備点検、展示資料のデータ入力(リスト作り)などを行い、展示期間終了後には資料の収納、展示ケースの撤去などを行った。

2. 上野ひさ関連資料の調査と整理

東京音楽学校出身の上野(田中)ひさに関する資料の受け入れのための作業を行った。まず、上野邸を訪れ音楽関連資料と思われるものを段ボール箱に詰め、史料室にて大まかな分類(書籍、楽譜、手紙など)を行った。その後、資料をリスト化して整理した。報告者はこれらの作業を部分的に担当した。また、受け入れられた段ボール箱は数十箱に及び、これらの資料のうち一部は資料展示の際に公開された。

3. 大井悌四郎関連資料のリスト作成

史料室に寄贈された大井悌四郎関連資料のリスト作成作業を行った。未入力であった楽譜や書籍などの寄贈資料のうち、段ボール 3 箱分の資料をリスト化した。これらの資料には書き込みがされているものや新聞記事を貼付けてあるものも多く、今後の活用が期待される。

4. 歴史的資料・写真のデジタル化

史料室所蔵の「連合軍司令部ヨリノ指令」ファイル一綴りと、昭和初期の東京音楽学校に関する写真アルバム 2 冊+数枚の関連写真(卒業生所蔵)のデジタル化を行った。

5. 演奏芸術センター寄贈資料の演奏会プログラム整理

昨年度に引き続き、演奏芸術センターから寄贈された資料を整理した。昨年度作成の目録(詳細は昨年度の作業記録参照)によると寄贈された大量の演奏会チラシやパンフレットなどはそのほとんどが大学史史料室に所蔵していない資料であったため、これらの資料をそれぞれ 2 部ずつ年代順にファイリングした。

6. 東京音楽学校時代のピアノ課題データの補足

以前より Excel データの形にまとめられていた東京音楽学校時代のピアノ課題のリストの修正に着手し、作曲家名や作品名が特定できるものに関しては欧文表記でリストに加え、リストから抜け落ちていたピアノ課題の補足入力も行った。しかし、楽曲情報の不足や現在とは異なる人名表記のために特定できなかったものも少なくない。

7. その他

以下の作業も行った。

- 寄贈資料（自筆譜資料など）の点検
- 教育資料編纂室の引っ越しに伴う資料移動関連作業（資料の箱詰めなど）
- 演奏会関係資料の整理
- 第6ホール関係資料運搬
- 明治大学博物館（第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」）見学

2.5.3. 寄贈資料整理の記録

2.5.3.1. (1)大久保利泰氏旧蔵史料整理作業報告

大久保利泰氏旧蔵史料整理作業報告

2013年10月31日 石田桜子

2011年11月に大久保利泰(としひろ)氏より演奏会プログラムを中心とする史料群が大学史史料室に寄贈された。在職中より石田が整理作業にあっていたが、2013年10月、その残務を業務委託によって完了した。

委託期間は2013年10月7日～31日、そのうち大学史史料室における作業日は7日、21日、24日、28日の4日間である。

【史料の構成】

史料群は演奏会プログラム、ちらしとチケット半券及びその他の付帯物によって構成される。受入時にすでに寄贈者によって大まかに、演奏会プログラム(以下「プログラム」と、「チラシ」「入場券」と書いた袋とに仕分けられていた(以下『「チラシ」袋』、『「入場券」袋』)。主な数量は以下のとおり。

プログラム 214点

ちらし 118点

(うちプログラムに付帯23、「チラシ」袋にあったもの95。この95点のうち相当するプログラムがあるもの45、ちらしのみのももの50)

チケット半券 150点

(未使用チケットを含む。うちプログラムに付帯112、「入場券」袋にあったもの38。この38点のうち相当するプログラムがあるもの24、相当するちらしがあるもの2、チケットのみのももの10)

チケット袋 14点 (「チラシ」袋と「入場券」袋にあったもの。うち相当するプログラムがあるもの13点)

公演時の告知、新聞切り抜きなど、その他の付帯物はすべてプログラムに挟み込まれていた。

史料の大半が1950年代から1960年代にかけての演奏会プログラム、ちらし、チケットであり、内容はクラシックのみならず、ジャズ、タンゴ、ポピュラーなどそのジャンルは多岐にわたる。コルトー、カラヤン、ハイフェッツ等外来音楽家を中心に初来日公演も多く、洋楽史上貴重な史料群と言えるだろう。特徴的なのは、1956年4月のヒンデミットとウィーン・フィル、1959年5月のストラヴィンスキー特別演奏会(チケット半券のみ)、1953年10月のジャック・ティボー慈善演奏会(チケットのみ。その年の9月にティボーは飛行機事故で死去しているため、開催されなかったと考えられる)など。

【整理方法：史料本体】

プログラムを中核とし、次いでちらし、チケット及びチケット袋の順で段階的に整理した。

まず、プログラムに公演年月日を記載した整理用の付箋を立て、年月日順に配列し、メタデータを作成した。ツアープログラムの場合は、その初日を採用した。この際、年代が記載されていないプログラムに関しては年代同定のための調査を行った。なお、便宜上、1961年までは1年ごとにファスナー付の透明袋に収納。今後は中性紙保存箱に収納予定。

続いてちらし、チケット及びチケット袋も同様に整理し、それと並行して、プログラムとのマッチング作業をプログラムのメタデータを元に行った。その結果、相当するプログラムがあるものはメタデータに出所を記録した上でプログラムの付帯物とし、それ以外のもものは独立した史料として扱った。

付帯物扱いのちらし、チケット等はプログラムに挟み込み、それ以外のもものは整理用付箋とともにクリアファイル、クリアブックに収めた。

【整理方法：メタデータ】

Excel を使用し、プログラムは「pg」、ちらしは「flier」、チケットは「ticket」（それぞれ相当するプログラムがないもの）シートに分け、年代順にリスト化した。仮の整理番号として、公演年月日を数字 8 桁にしたものを付記し、同日に複数史料があるばあいは a,b…とアルファベットを加えた。これは、通し番号にくらべて配列・検索の便宜性を向上し、今後の修正・変更を容易にするためである。

今回は受入リストを兼ねた第一次リストであるため、項目は公演年月日、演奏会名、付帯物を中心とし、演奏者名は最低限に、演奏曲目も注記程度にとどめた。

- ・ 公演年月日

ツアープログラムの場合、配列の関係上「月」欄には初日の月のみ入力し、その後の月は「日」欄に [] に入れて追記した。同定調査によって判明した年月日も [] に入れ、その典拠を備考に記載したが、調査を行ってもなお不明確な場合はさらに「?」を追記した。

- ・ 演奏会名

原則的に表紙および中扉より転記。

- ・ 演奏者名

日本人演奏家および日本の演奏団体は日本語、外来演奏家および演奏団体は原語もしくは英語で表記。区切りはすべて「、」に統一。

【今後の課題】

現在、暫定的にビニール製のファスナー付袋やクリアファイルなどに史料を収めているが、大きさがまちまちであるため、袋に入らない物は別置したり、ちらしなどの中には折りたたんだまま収納せざるを得ないものもある。史料の保存を考えると、将来的にはできればデジタル化した上で、1 点ずつ中性紙の袋に入れ、整理番号を貼付するのが適当と考えられる。

また、受入時にすでに湿気等で互いに張り付いていた史料もあり、この剥離作業も専門家の手で行われることが望ましい。

さらに、時間的制約もあり、年代同定調査が不完全な部分もある。本格的なデータベース作成の際には、追加調査が期待される。

2.5.3.2. (2) 上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 i

上野ひさ氏資料の整理・目録作成を終えて

作成日：2016年1月26日
作成者：仲辻真帆

◇担当作業について

2015年11月より2016年2月まで、上野ひさ氏（本稿ではこれ以降敬称を省略する）の資料に対し、以下の4つの作業を担当した。作業時間は50時間であった。

①楽譜・書籍の目録作成

資料名（著者）や出版に関する情報のほか、保存状態、署名と書き込みの有無などを調査し、その結果をデータ入力した。

→ 書き込みの内容については、一部のみ備考に記した。

②演奏会プログラムの整理、状態確認

演奏会プログラムを年代ごとに並べ替え、資料点数をかぞえた。

→ 一部の資料に関しては、明治・大正・昭和といった大分類のみならず、年月日の順に並べた。

③書簡の整理、状態確認

書簡を封書と葉書に大別し、それぞれの資料点数を集計した。

→ 封書が405点、葉書が329点あったが、上野ひさ宛・直昭宛でないものも多数含まれている。京城時代のものもあった。

④写真の整理、状態確認

写真995点を整理・分類した。台紙に貼りつけられた現像写真32点、その他の現像写真826点、フィルム114点、写真葉書（絵葉書含む）19点、封筒（写真が入っていたと考えられるもの）4点をかぞえた。

◇作業時の疑問点／今後に向けて

・同一資料が複数見受けられたが、今回はそれぞれ1点としてかぞえている。

・音楽関係以外の資料も含まれていた。次の段階でそれらを除外するか。

・楽譜や書籍の目録作成において、分類の方法や記載の仕方が曖昧になっているものもあり、今後検討が必要である。

→ たとえば、〈無伴奏ヴァイオリン曲〉と〈ピアノ伴奏つきヴァイオリン曲〉が同じ扱いになっていたり、〈今回の分類に当てはまらない楽器編成の楽譜〉と〈手稿資料（ノートなども含む）〉がいずれも「その他」となっているのが現状。「資料名」も、〈表紙から得た情報〉、〈標題紙から得た情報〉などが混在しており、「曲名 作曲者 編曲者」「曲名 編成」など様々な提示の仕方となっているため、今回は基準や方法を定める必要がある。

・楽譜、書籍、演奏会プログラムには、上野ひさのサイン、別の人（演奏者など）のサインのほか、覚書等の書き込みが記されたものもある。現時点では、上野ひさ自身による書き込みとそうでないものを区別していない。（もし区別するなら筆跡の問題も出てくるだろう。）書き込みの中には年代、場所のほか重要な記述もあったため、それらを丁寧に検証すべきかもしれない。

・演奏会プログラムについては、今回、東京音楽学校関連のものを区別して資料点数を計上したが、そこには〈東京音楽学校で行われたが主催者が同校でない演奏会〉〈奏楽堂で開催されていないが東京音楽学校の主催による

演奏会〉なども含まれている。実際のところ、一般の演奏会プログラムとして大別されている資料のなかにも、まだ東京音楽学校関連の資料が少なからずまぎれているようである。

・「演奏会プログラム」の中には、演奏会の半券などもあり、今回はそれらも1点として計上している。同一演奏会のチラシ、プログラム、半券があったとしても、現在はばらばらの状態である。また、演奏会プログラムのうち、開催年代不明のものも多数あったが、著名な音楽家の来日公演や楽団の定期演奏会など、追跡調査をすれば年代を特定できるものも多いと思われる。

・書簡は上野ひさ宛、直昭宛、その他の人宛のものが混在している。ひさ宛の書簡、あるいは差出人や内容などから絞り込めば、資料点数以上のことがわかれると思われる。書簡や写真は年代や場所ごとに改めて整理・分類すべきか。

◇上野ひさ資料の歴史的意味、研究利用の可能性について

・楽譜や洋書も多くあり、中には「Hisa Uyeno Berlin 1926」「Hisa Uyeno 1928 Tokyo」などのように、サイン、年代、場所が書き込まれた資料もある。写真は、撮影した日時や場所が特定できるものもある。書簡の消印や内容も、ヨーロッパや京城にいた時期などを正確に把握する一助となる。
→ これらの資料は上野ひさ・直昭の経歴を詳細に裏付ける資料となり得る。

・大正期の東京音楽学校およびその在校生に関する研究はまだ十分に行われておらず、その実態解明のために本資料は大いに活用できる。音楽学校時代の上野ひさを伝える資料としては、ノートや写真があった。使用時期は不明だが、書込みのあるヴァイオリン楽譜なども見受けられた。

・演奏会プログラムは大正期のものが多く、当時の楽壇を知る手がかりとなる。また、「当時の声」という点では、音楽関係者と上野ひさとの書簡のやりとりも興味深い。特に書簡や写真は、現代の東京藝術大学に学ぶ学生に、100年前の卒業生を生身のものとして実感させる。

・個人的には、自分の研究でも核としている「手稿資料」に興味をもった。上野ひさの場合、京城第一公立高等女学校時代のノートや音楽学校時代のノートは、当時の授業内容などを伝える貴重な資料であり、学生時代を物語る興味深い資料である。

(2) 上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 ii

Hisa Uyeno Database and Documents

Thomas Cressy トマス クレッシ

27/01/2017

(作業時間数—40 時間)

- 担当した作業： I mainly had the task of entering (into a database) the titles, publishing details, condition and whether there was any handwritten notes of the books and music scores held by Hisa Uyeno/Tanaka, as well as some concert programmes and notebooks from her time at the Tokyo Music School.
- 作業上の疑問： I wonder if every person entered the details of the scores/books in the same style, will the final database be consistent when searching for results based on keywords?
- 課題： It would be to make the final database consistent in terms of entry style. Also if there was more time, collections of several different composer`s works and the works displayed in the programme notes could also be entered into the database to help with searches? For example if I search “Bach” into the database, not results from the programme notes or collections of the works of different composers.
- 上野ひさ資料についてコメント： I am very pleased and happy to have worked on creating this database for the documents relating to Hisa Uyeno. I think these are of great value for several reasons. Firstly, they provide an insight into the books and scores held by a violin student while at the Tokyo Music School (those signed “Hisa Tanaka” are especially useful in this regard), especially because of the high amount of piano scores included. The documents from the notebooks and class materials from the Tokyo Music School also provide more details on exactly what was taught in these classes, also the Japanese texts of Western music that was arranged to be sung in Japanese. Secondly, certain scores are signed with dates and have markings that show the music had been played – this not only has value in terms of performance practice studies, but it has helped me identify which pieces of Bach she performed in concert at the Tokyo Music School, which has been unclear until now. It also shows exactly what kind of scores the students at the school were playing and which shops they were buying it from, which is all of great value historically and in terms of the reception and musical culture surrounding Western music during this time in Japan. I will certainly be citing sources from this in my research and it has been extremely useful and productive for me to be involved in this project. There are several documents I have not seen yet that were entered into the database by others, so I look forward to searching the full database for more documents that can help with my research.
- 所感： I am very pleased to have worked on this and I am very encouraged that these kind of documents are being held at Geidai. I hope to be involved in future projects of the Archive Centre, as it was very interesting and useful for my research.

(2) 上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 iii

上野ひさ氏資料業務報告

2016年1月26日 太田 郁

●担当した作業内容

国内外の出版譜、図書等の情報入力

●作業時間

12時間

●作業時の問題

手稿ノート等、特に複数あって外見が似ており資料名を取りづらいものについては、大きさや色、状態など外見上の特徴についても明記する必要がある。

楽譜と文章のどちらも含む雑誌などはどの分類にすべきか迷ってしまった。

表記方法に多少ばらつきが出てしまっている。

●今後に向けて

備考欄とは別に出版年・出版社の項目があると入力の際にデータの取りそびれがないと思われる。

シリーズで所蔵しているもの（教則本、雑誌など）について、どの程度揃っているのか調査すると活用しやすいと思われる。

●上野ひさ資料について

・本資料が藝大にあることの意義

楽譜や手稿ノートは、東京音楽学校の学生が現場でどのような教育を受けていたか明らかにする一端となる。手稿ノートには音楽理論や和声課題などが書かれており、当時の器楽科の学習内容を知る事ができる。また、大学史史料室内には上野氏以外の学生の資料も数多くあるため、個人間あるいは年代間で比較することも可能だろう。今後藝大が所蔵することで、東京音楽学校周辺を研究対象とする研究者にとっては資料へのアクセスが容易になる。また、学校史や近代日本の音楽史に関連する資料群の拠点としての役割を果たすことができる。

・本資料の活用

報告者は近代日本の音楽史、特に日本人作曲家を研究対象としているが、上野ひさ資料からは、同時代の演奏家が作曲家とどのような繋がりを持っていたのか探るきっかけを得られそうである。例えば資料には山田耕筰や信時潔ら日本人作曲家の楽譜も含まれており、その作品の演奏機会がどの程度あったのか知る上での情報の一つとなりうる。

・研究対象としての可能性

楽譜・図書を含む出版物からは、国内外の出版事情の一端を窺い知ることができる。また音楽理論書など音楽学関係の所蔵からは、その後の上野氏個人の教育活動への影響を調査できるだろう。演奏会資料からは、『東京芸術大学百年史 演奏会篇』を併用した演奏レパトリー等の研究も可能になると考える。

3. まとめにかえて（結果と提言）

1) 目的の達成について

本報告の冒頭（2頁「1.1.」）にアーカイブセンターの設立目的、大学史文書データ研究プロジェクトの目的を記した。これらの理念と目的に照らして振り返る。

総合芸術アーカイブセンターは、①学内に分散する多様な文化資源を調査し、②歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元する等、③文化芸術情報の活用方法を研究する目的で設立された。

センターはまず、①学内に分散する多様な文化資源を調査した。学内にアーカイブすべき文化資源がどのぐらい、どのように保管・保存・放置されているのか調査しリストアップした。大学史史料室でも美術と音楽の室内に保存しない文書類が、事務倉庫等にどのような状態で存在するのかわ調査した。

次に②歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元するため、文書関係の一部ではあるが、デジタル化し、公開し、シンポジウムや授業等に活用した。文書プロジェクトだが、古い楽譜資料から復元演奏し（復元演奏と録音は科研費による）、録音音源と楽譜原資料が連動するコンテンツとして公開した。コンテンツ作成は文書プロジェクトが提供した素材により情報システムプロジェクト（嘉村情報芸術研究員）が行った。

このように①と②の遂行により③文化芸術情報の活用方法を研究する目的は一応の達成を見たと言えよう。

大学史文書プロジェクトはアーカイブセンターのサブプロジェクトとして具体的な実践内容をこう記した。

この目的に鑑み、大学史文書データ研究プロジェクトは、④東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、⑤デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う。

「百年史」編集を終えて以降の大学史史料室は、年史編集からアーカイブズ構築に舵を切り、学部ごとに関連資料の収集と整理を行っていたが、アーカイブセンターの理念と目的を両学部が共有することにより、④東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進することができた。

センター発足当時は、資料原物の保存と利用がまだ主流であり、デジタルアーカイブはどちらかといえば後回しで、必要な場合に限りデジタル化していたが、⑤デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う目的で、公開活用を見据えた自主的なデジタル化に着手することが出来た。センターとしてHPに公開したコンテンツは3点で、そのうち「東京音楽学校が作った“うた”」と「日露戦争写真」については著作権関係の研究と手続きの実践も行った。残る「青い箱」は多様な写真を含んでおり、公開した上で研究中である。

このように④と⑤の目的に対しても、機関内に一定の実践を終えることができた。

2) アーカイブセンターの意義

■アーカイブセンターのプロジェクトによって成し得た事、試み得た事は決して小さくなかった。

美術学部教育資料編纂室はそれまでに長い歴史を刻み、開室もない音楽学部大学史史料室も「アーカイブズ構築」をキーワードに挑戦を始めていた。全国の大学が周年事業を機に年史編纂からアーカイブズへの道を模索し、とくに国立大学が公文書管理法に照らした法人文書の収集・保管・利用を考えねばならなくなったタイミングもあり、総合芸術アーカイブセンターの発足は、時宜に合ったプロジェクトであった。

藝大文書のアーカイブは、学内のアーカイブ関連部署と連携することで、全学的にのこし・伝えるべき有形・無形の財産を視野に入れ、文書保存の評価選別も行うことができるのである。

アーカイブをキーワードにすると、時代や専門分野を越え、文化の伝承というひとつの大きな価値観と流れのなかに、文書、音楽作品、美術作品、演奏、作曲、美術制作などが共存するイメージを描くことが可能になる。巨視的な視野から各専門の精緻なアーカイブを実践することは本学にとってきわめて必要であろう。

■文書プロジェクトにおけるアーカイブセンター・プロジェクトの意義と成果

①専門ごと・分野ごとの壁を越える視点を構築させたこと。

これまで別々の分野と認識して活動していた文書、3D、音響映像がデジタル情報を発信するために情報システムの研究とつながった。文書と音響映像の協働が、文字情報のデータ化のためにも演奏情報の蓄積のためにも相互に裨益し補完することがわかった。同様のことが美術側の文書と3Dにも言えるであろう。

②アーカイブズ構築という方向性が明確化したことで、両学部の資料が大学アーカイブズとして機能していく将来像が示されたこと。

③文書や写真のデジタル化を促進したこと。

時代の趨勢でもあったが、この5年間でデジタル化の波は目覚ましいものがあり、そうした情報を定例ミーティングにより共有することで、辛うじて時代の流れを知ることができた。

④アーカイブズ研修の受講。現場のスキルアップと世間のアーカイブ事情に関する知識更新のため、研修を複数回受講できたのはありがたいことであった。

3) 検証されたこと

■スタッフの成長。アーカイブアシスタント（学生がアーカイブ実践に関わること）の意義。

アーカイブセンター発足時、音楽側の史料室は開室から間が無く、目録作成も始まったばかりであった。すでに一通り目録作成を終えていた美術側とはまったく状況が異なっていた。そこから5年間でリストが作られ、デジタル化もそれなりに進んだのは、特別研究員2名（石田桜子、伏木香織、23-24年度）と後任の教育研究助手（星野厚子、25-27年度）の着実な仕事の成果である。アーカイブアシスタントも時間なりによく計画的に仕事を進め、壊れた資料やタイトルのない資料でもリストを作成し、デジタル化もこなした。

星野教育研究助手が史料室の現状をどのように受けとめ、どのように業務に携わり、どのように育ったか、また大学院生のアシスタントが史料室の仕事にどのように関わり、そこから何を学び取ったかは、「2.5. 文書資料のアーカイブズ構築に関する実践報告」から読み取られる通りである。

史料室はその日その日の対応に追われるが、そうした動きにあまり左右されず、助手が着々と目録を作成したことが一定の蓄積につながった。藝大史に関わる質問は基本的に橋本が受けるが、同助手も調査手順を少しずつ覚え、3年目には準備調査の一部を任せられるまでになった。助手は、どのような用向きでも厭わず引き受け、自ら学ぶ姿勢を貫いた。他大学のアーカイブズ関連展示に助手とアシスタントも出向き、史料室の展示にその経験を生かした。

25-27年度に勤務したアシスタント2名はアーカイブズ学を体系的に学んだわけではなく、“法”と“倫理”の理解はまだ不十分であろう。しかし寄贈資料の入力と文書や写真のデジタル化を通じて、資料の背景やその文化的価値への理解を深め、アナログ資料の情報を、利用しやすく記録することを実践から習得した。史料室での展示や資料提供などを見聞し、その重要性については認識できたと考える。

アーカイブアシスタント採用の意義は、「資料を理解し」「情報を適切に記録し」「適切に利用する」ことを実践的に学べることにあったように思う。物としての資料を大切に、それに関わった人物に敬意を払い、資料の価値を伝える必要は、本学の大学史文書や寄贈資料を前にすれば、感覚的に理解ができてしまうからである。その意味で、アーカイブズ学はアーキビストの専有物などではなく、資料を使用して論文などを書く、あるいは創作や演奏活動の成果を世に問う可能性のある全ての学生に身近なものであることを、アシスタントの成長を見ながら気付かされた次第である。

4) 緒に就いたこと

■発信。

成果が見えにくい中で、音楽側では、復元音源および写真のデジタルデータをホームページから発信することができた。音源作成の過程では山田香特任助教の協力により伴奏付が行われ、亀川教授の録音と編集を経て、発信は嘉村芸術情報研究員の尽力によって実現した。公開と発信をさらに強化せねばならない。

5) 着手すること

■コンテンツの作成と発信。

5 年間で目録は充実し、発信する材料は揃ってきたので、これからはコンテンツ作成と恒常的な発信が課題である。報告者は平成 28 年 2 月にデジタルアーカイブの一日講座を受講し、3D やドローンを含む撮影から発信にいたるデジタル作業の色々な場面でアーキビストに必要とされる技術・知識を学んだ。文書プロジェクトでは、原資料の収集や保護など、アナログ作業の割合が圧倒的に大きいのが、デジタルによる発信が主流となり、デジタル媒体による資料収集も珍しくない。こうした課題が見えてきたのもアーカイブセンターにおける情報共有と大小の挑戦を経たおかげである。

6) 残された難題

■アーカイブズとしての組織確立。

歴史資料等保有施設の指定を受けることは当初より目的としていたが、実現しなかった。工夫の余地があったのか検証も必要であろうが、施設や組織が指定条件を満たさないため、未だに目処が立っていない。

■経過と成果のアピール。

全学的に視野を広げ、掘り起こそうとしたことは意義があったと考えられるが、そのような伝統のなかった本学で行うには、今一つ戦略的でなかったことが悔やまれる。芸術に属する多分野それぞれの専門性と独創性を本領とする本学では、分野を越えた連携による全学的な取り組みは必ずしも得意ではない。それゆえ全学に呼びかけ、全科、全研究室、全教員室を調査する方針は画期的であったと言える。しかしながら、それを浸透させ、必要をアピールし、着実かつ大胆に成果につなげていくことが十分にできなかったのではなかろうか。共感されやすいテーマに絞り込み、全学的に成果を共有することができれば、学内へのアピール力は増したかもしれない。

7) 今後の現場スタッフに必要とされること

■コンテンツを史料室においても作成すること。

アーカイブセンターでは情報プロジェクトにコンテンツ作成も発信も依存したが、今後は史料室スタッフ自身がデジタルアーカイブに習熟し、史料室でもコンテンツを作成することが求められよう。

■著作権等に精通すること。

収集から保存、発信（利用）の局面において適切に対応するため、著作権に精通することは今後ますます必要となる。

■デジタルアーカイブのスキルアップに努めること。

アーキビストの育成か採用か、いずれにしても現場の人材が学ぶ機会を増やし、さらに、学んだ人材の活躍場所を創出することである。

8) 大学史史料室業務の需要、効率化、採算性に関する課題

■物の手入れやデジタル化には人手が必要だが、それが足りないのは大学史史料室の現場で、対応・相談業務が増加しているためである。要は学内外に利用者が増えているのである。増えていると言っても、学内の事務職員のニーズは、学外からの問い合わせへの回答か、各部署で史実や人物に関する情報が必要になった場合の駆け込み寺である。相談業務にはデジタル化による簡素化は難しく、効率化を図りにくい。

いずれにせよ史料室側では、問い合わせ、閲覧、研究、取材のための準備調査が日常的に行われている。研究相談や資料寄贈の相談などは来訪、メール、電話で受けるのが、それだけでは済まず、「直接会ってお話を」「お時間をいただきたい」依頼がほとんどである。長い眼で見れば、その方々からもたらされる情報は史料室にとっても有益であり、提供した内容と対応にかけた時間は、結果として成果物の寄贈件数に現れてくる。ただ、閲覧者のためにはスタッフ側が請け負う準備調査の時間を減らし、調査者自身が検索しやすいリスト公開を目指すのが望ましい。原則として電子コピーのサービスは行わず、撮影を許可しているが、来訪困難な方に対しては調査を代行し資料を複写して郵送することもある。こうした対応時間数に制限はなく、利用料金も送料も無料である。大学としても誇るべき社会貢献であると考えているが、こうした依頼が事務局や図書館を通して行われると対応は全く変わる。たとえば放送目的の画像など、大学史史料室で直接対応すると、幾通りかの提案を行い、適切なものを提供するが、事務局を通すと、多くは依頼側か事務局側が特定した、「百年史」既載の画像から選ばれ、1 点につき 3240 円である。大学史史料室が調査やデジタル化を行っても料金徴収のシステムは同じである。対応のあり方を検討することも課題である。

9) 今後の大学史史料室におけるアーカイブズ構築とデジタルアーカイブ

文書 P が行った研究は、藝大文書がかかえる著作権、法人文書あるいは歴史的資料を扱う施設としての整備、公開／非公開の法的根拠、資料の歴史的文化的意義など、多岐にわたる。5 年間で出せた成果としては、情報プロジェクトや音響映像 P のおかげで HP にあげられたコンテンツ、助手やアシスタントの成果である資料リスト、連携（音楽と美術、4 プロジェクトなど）から魅力あるアーカイブが生まれるという確信、アーカイブズ学の学びと実践、であろうか。まだ発信力に乏しいが、アーカイブズの根幹となる要素が揃ってきた。アーカイブセンターが掲げた理念に充分応えたとは言い難いが、課題が明確化したことは、次につながる成果であろう。

アーカイブセンターの発足当初、定例ミーティングで「藝大がアーカイブすべきモノ」をリストアップしたが、多様なモノをアーカイブするには、「専門や部署の違いを乗り越えた共有・連携」という難題に直面することとなった。歴史的に見ればこの難題は、美術学校と音楽学校の合併から成立した本学の本質的な課題である。さらに元をたどれば美術学部も音楽学部も、相異なる技術や専門分野を一つの学校や学部として包摂しているため、様々な形状と質の壁をかかえていて、これが顕在化したとも言える。壁の固さと高さを確認し実感もしたが、組織を縦横に俯瞰し、検証し、大学の来し方そのものを明らかにして伝承するのがアーカイブである。アーカイブセンターの 5 年間はその事を再確認させ、藝大の原型を再認識させた。28 年度はアーカイブ業務を各学部を引き受けていただけるならば、学部としてもアーカイブを考え、構築を推進する体制を敷いていただけるよう切に願う。

藝大の法人文書保存と利用における急務は、大学史史料室としての規則を早急に定め、運用の根拠を客観的に説明可能な状態とすること、音楽学部と美術学部は現在なおアーカイブズの三本柱「収集・保管・利用」を別々に行っている。しかしアーカイブズ構築が音楽と美術の共有の目的となり、両室に一定の方向付けがなされたことは事実である。

大学史史料室の利用は、学内者より学外者が多い。東京大学、京都大学、九州大学などの文書館でも同様の傾向と聞く。この現状に対して、学内の関心の薄さを指摘する声や、学内利用を増やす努力をすべしとの意見もあるが、むしろそこから本学のアーカイブズの本質的な必要と意義を読み取ることができるのではなからうか。すなわち、学外者の利用が多いのはそれだけ広く国民に利用されている証拠なのである。彼らが本学の大学史史料室を利用とする理由は、本学が日本で唯一の官立美術学校・音楽学校を継承する藝術大学だからであり、真っ先に調査すべき機関だからなのである。その重責に応えるアーカイブ構築こそが、本学の負う大任であり、日本の誇りとなる財産である。

10) 課題と提言

5 年間で見てきたことの多くは、成果より困難と課題である。そこからより着実な成果に向けて立ち上がるまでである。文書で言えば、アーカイブズへの歩みを止めず、デジタル化の促進がさらに必要である。これもアーカイブセンターの試行錯誤の中で得た確信である。

■アーカイブズの意義を事あるごとにアピールし、学部内に存在を浸透させ、アーカイブズが教職員・学生の誇りとなるまでとことまで変えていく。要は「あったほうが良いもの」「あるべきもの」から「無いと困るもの」に転換させることである。

■大学アーカイブズ（大学史史料室）規程、利用規程、資料収集規程を早急に制定し施行する。

これにより、現場の業務にも一定の基準や尺度が設けられるからである。

■大学アーカイブズ（大学史史料室）を大学の組織として可視化する。

■大学史文書を、たとえば重要文化財の指定なども視野に入れ、大学史文書の価値を客観的に評価していただく。

■体系的にデジタル化を進め、デジタルデータの公開を進める。

■大学史史料室への依頼件数の増加は今後も見込まれる。これに対応し続けるには、史料室全体の人員配置を充実させるとともに、アーカイブズの将来を見据えた人材育成を行う。

■藝大アーカイブズ及び藝大のアーカイブについて学内で共有されるよう、有志会ないし“連絡会”から再出発し、幅広く意見やアイデアを結集する。

1.1) 5年プロジェクトの先に

教育資料編纂室と大学史史料室は5年間、アーカイブセンターのサブプロジェクトとして活動を行った。両室の本務は大学の歴史の絶え間ない蓄積によって“大学史の礎”ないし“大学の経営戦略基盤”を成すところにある。プロジェクト経費により収納環境が改善され、機材購入、資料整理、資料の移動が推進され、アーカイブズ構築に必要な基盤が美術側と音楽側に同時にもたらされたこと自体、画期的な実績である。プロジェクト発足とともに音楽側で本格的に着手した目録作成が大幅な進展を見たのは、第一に配架スペースの確保を初めとする環境改善であり、第二に資料整理と入力要員を担当する人員配置のおかげである。平成21年度に全学的アーカイブズを目指して始まった学史プロジェクトは、アーカイブセンターの5年間によって目に見える形でアーカイブズ構築を行うことができた。そのことはアーカイブズ構築の基本が設備環境と人的措置にあることを立証する結果ともなった。大学史史料室の研究利用が今後も促進されるかどうかは、この基本を継続することができるかどうかにかかっていると云えよう。

プロジェクト期間を通じてメンバーおよび事務局には折々に適切なご指導ご助力いただいた。メンバー一人一人の誠意ある任務遂行に感謝し、期間中に学内外からいただいた数多のご支援に心から御礼申し上げます。

(20160306)

※本報告のうち、「2.3.」は美術学部教育資料編纂室からの報告、「2.5.」は担当者各人の記名報告である。それ以外の箇所はそれぞれ記録やデータに基づき、担当者の協力を得ながら橋本が作成した。